

Naga o
長 尾 遺 跡

—長尾市営住宅建替に伴う発掘調査報告書—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第417集

1995

福岡市教育委員会

長尾遺跡

—長尾市営住宅建替に伴う発掘調査報告書—



遺跡略号 NGO
遺跡調査番号 9212

1995

福岡市教育委員会

序

玄界灘に臨む福岡市は、弥生時代より大陸文化の窓口として栄えたところであり、市域内には貴重な遺跡が数多く眠っています。

しかしながら、九州の中枢都市として発展を続けるその蔭には開発によって失われてゆく埋蔵文化財も多くあります。福岡市では、やむなく失われてゆく遺跡については記録保存し、後世にその資料を残すように努めています。

本書は、城南区樋井川にある市営長尾住宅の建替えに伴って調査された長尾遺跡の発掘調査報告書です。調査の結果、谷底から投棄された壺や器台などの弥生式土器が多量に出土しました。これらは湧水への祭りとそこに暮らす弥生人の生活を物語る貴重な資料です。

本書に収録された資料が、市民の皆さんに広く活用され、埋蔵文化財保護への一助になるとともに、学術研究の分野においても役立つことを願うものであります。

なお、発掘調査から資料整理までの間には多くの方々のご指導とご協力をいただきました。記して深く感謝の意を表します。

平成7年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 尾花 剛

れいげん

- 本書は、福岡市教育委員会が1992年5月15日から7月11日に、福岡市若松尾住宅の建て替えに先立って緊急発掘調査した長尾遺跡第1次調査の発掘調査報告書である。
- 本書に使用した方位はすべて磁北方位である。
- 遺構は呼称を尽可能して、土屨をSK、環をSD、洗水路をSX、ピットをSPとし、遺物番号は見当のあとに其々通してつづけた。
- 本書に掲載した遺構と遺物の実測は小林義彦と八丁由香が行なったが、打築石壁は杉山富雄氏の努力を得た。また、製図は小林、八丁と藤村佳公惠が行なった。
- 本書に掲載した写真は遺構・遺物とともに小林が撮影した。
- 長尾遺跡第1次調査にかかる遺物・記録類は一括して埋蔵文化財センターに保管する予定である。
- 本書の執筆・編集は小林が行なった。

遺跡調査番号：9212	遺跡略号：DKR-C	分車地図番号：63-0203
調査地地積：福岡市城市区疋井川四丁目323-3外		
開発面積：9,000 m ²	測量対象面積：1,000 m ²	調査実施面積：797 m ²
調査期間：1992年5月15日～7月11日		

本文目次

序	
I.はじめに	1
1. 発掘調査にいたるまで	1
2. 発掘調査の組織	1
II.立地と歴史的環境	3
1. 立地と歴史的環境	3
2. 周辺の遺跡	5
III.調査の記録	10
1. 調査の概要	10
2. 調査の記録	10
1). 土 壤	11
2). 流水路	15
3). 谷	18
4). ピット	37
5). 包含層の遺物	37
IV.おわりに	38

挿図目次

Fig. 1. 周辺遺跡分布図 (1/25,000)	2
Fig. 2. 長尾遺跡周辺地形図 (明治33年、1/30,000)	4
Fig. 3. 長尾遺跡位置図 (1/5,000)	6
Fig. 4. 第1次調査区周辺現況図 (1/1,000)	7
Fig. 5. 第1次調査区遺構配置図 (1/200)	9
Fig. 6. 1号土壙実測図 (1/30)	10
Fig. 7. 1号土壙出土土器実測図 (1/4)	11
Fig. 8. 2~4号土壙実測図 (1/30)	12
Fig. 9. 5~7号土壙実測図 (1/30)	13
Fig. 10. 3・5号土壙出土土器実測図 (1/4)	13
Fig. 11. 1~3~8号流水路出土土器実測図 (1/4)	14
Fig. 12. 1号流水路出土石器実測図 (1/3)	15
Fig. 13. 谷頭上層断面実測図 (1/40)	16
Fig. 14. 谷上層出土土器実測図 1 (1/4)	17
Fig. 15. 谷上層出土土器実測図 2 (1/4)	18
Fig. 16. 谷頭下層遺物出土状況実測図 (1/40)	19
Fig. 17. 谷下層出土土器実測図 1 (1/4)	20
Fig. 18. 谷下層出土土器実測図 2 (1/4)	21

Fig.19. 谷下層出土土器実測図 3 (1/4)	22
Fig.20. 谷下層出土土器実測図 4 (1/4)	23
Fig.21. 谷最下層遺物出土状況実測図 (1/40)	24
Fig.22. 谷最下層出土土器実測図 1 (1/4)	25
Fig.23. 谷最下層出土土器実測図 2 (1/4)	26
Fig.24. 谷最下層出土土器実測図 3 (1/4)	28
Fig.25. 谷最下層出土土器実測図 4 (1/4)	29
Fig.26. 谷最下層出土土器実測図 5 (1/4)	30
Fig.27. 谷最下層出土上器実測図 6 (1/4)	31
Fig.28. 谷出土石器実測図 1 (1/3)	32
Fig.29. 谷出土石器実測図 2 (1/3)	33
Fig.30. 谷出土石器実測図 3 (1/1)	34
Fig.31. 谷出土上製品実測図 (1/3)	34
Fig.32. 17号ビット実測図 (1/20)	36
Fig.33. 3・17号ビット出土土器実測図 (1/4)	36
Fig.34. 包含層出土石器実測図 1 (1/3)	37
Fig.35. 包含層出土石器・管玉実測図 2 (1/1)	37
Fig.36. 長尾遺跡弥生土器編年案 1 (1/16)	39
Fig.37. 長尾遺跡弥生土器編年案 2 (1/16)	40

図版目次

- | | |
|--|---------------------|
| PL. 1. (1).調査区全景(南より) | (2).台地上遺構群(東より) |
| PL. 2. (1).調査区全景(南より) | (2).調査区全景(東より) |
| PL. 3. (1).1号土壤(東より) | (2).1号土壤(東より) |
| PL. 4. (1).2・3号土壤(西より) | (2).4号土壤(東より) |
| PL. 5. (1).5号土壤(南より) | (2).6号土壤(南より) |
| PL. 6. (1).7号土壤(南より) | (2).17号ビット(南より) |
| PL. 7. (1).谷流水路全景(西より) | (2).谷頭流水路(東より) |
| PL. 8. (1).1号流水路(南より) | (2).9号流水路(北より) |
| PL. 9. (1).谷最下層遺物出土状況(南より) | (2).谷最下層遺物出土状況(東より) |
| PL. 10. (1).谷頭上層断面(東より) | (2).谷頭下層遺物出土状況(東より) |
| PL. 11. (1).谷最下層遺物出土状況(東より) | (2).谷最下層遺物出土状況(北より) |
| PL. 12. (1).谷最下層遺物出土状況(東より) | (2).谷最下層遺物出土状況(東より) |
| PL. 13. (1).谷最下層遺物出土状況(東より) | (2).谷最下層遺物出土状況(東より) |
| PL. 14. 出土土器 1 (1/4) | |
| PL. 15. 出土土器 2 (1/4) | |
| PL. 16. 出土土器 3 (1/4) | |
| PL. 17. 出土土器 4 (1/4) | |
| PL. 18. 出土土器 5 (1/4)・石器 (1/3)・土製品 (1/3)・管玉 (1/1) | |

I. はじめに

1. 調査にいたるまで

博多湾にむかって拡がる福岡平野の南郊には背振山系からのびた油山があり、その北麓には幾筋もの低丘陵が枝を張るように派生し、眼下には水田が広がっていた。しかし、中枢都市として発展する福岡市は、都市機能の拡充による急速な人口の増加を招き、郊外の丘陵地帯は切り開かれて一面の宅地と化している。

昭和30年代以降、人口増加に伴う住宅不足解消のために平屋建ての木造住宅が市内の各所に建設されたが、時の経過とともに昭和50年代以降は老朽化した住宅の建替えによる中層化が図られている。長尾遺跡のある市営長尾団地もその中のひとつで、建替えに先立って埋蔵文化財の有無についての照会が福岡市建築局より提出された。長尾団地は、昭和55(1980)年の文化財分布調査時には既に宅地化されており、遺跡としては周知されていなかった。しかし、申請地が弥生時代中期の集落、墳墓遺跡として著名な宝台遺跡の北にのびる丘陵上に立地し、かつ既存住宅が木造で地下深くまで破壊が及んでいないことなどから、試掘調査による遺跡の有無確認を改めて実施した。

試掘調査の結果、申請地はその大半が住宅の建築に際して削平されていたが、中央部では東から貫入する谷とその上縁からは弥生時代中期後半の土器を含んだ不整形土壙等が確認された。この結果をもとに埋蔵文化財課は建築局と協議を重ね、申請地の中で遺跡の残る約1,000m²については発掘調査による記録保存を図ることになった。

平成4(1992)年5月15日の重機による表土剥ぎから始めた発掘調査は、四周の住宅建築と同時に進められ、梅雨明け間近かの7月11日の埋め戻し作業を以てすべて終了した。発掘調査では、谷の底に投棄された弥生時代中期～古墳時代初めの壺、甕や石器等が数多く検出され、更にその谷に注ぎ込んだトンネル状の自然流水路が確認された。その間、谷の冠水による遺物の流失や廃棄された既設の埋設管との誤認による新設管の破損が生じた。殊に新設管の破損にあたっては建築局の関係諸氏に多大のご迷惑をおかけした。しかし、このような中で発掘調査が無事終了し、調査報告書の発行に至ったのは建築局の関係諸氏や現地での建築担当者のご理解と署名での発掘調査や資料整理に従事された方々のご協力に負うところが大きく、ここに記して感謝の意を表します。

2. 発掘調査の組織

調査委託 福岡市建築局

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 井口 雄哉(前任) 尾花 剛(現任)

調査担当 福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課第1係

庶務担当 第1係長 飛高憲雄(前任) 横山邦繼(現任) 吉田麻由美(前任)

西田結香(現任)

調査担当 小林義彦

調査員 八丁由香 藤村佳公恵

調査・整理作業 有富益子 大瀬良清子 緒方マサヨ 金子由利子 後藤ミサヲ 坂田美佐子

柴田勝子 柴田タツ子 柴田常人 土斐崎孝子 土斐崎初栄 馬場ノツ子

平井和子 藤崎久子 堀ウメコ 松本藤子 宮原邦江 村嶋里子 百武義隆

門司弘子



II. 立地と歴史的環境

1. 立地と歴史的環境

三方を三郡山系と背振山系の小山塊によって囲まれ、博多湾にむかって開口する福岡平野は、狭義的には南郊の油山山塊から派生した平尾丘陵によって画された東の福岡平野と西の早良平野とのふたつの小平野からなる。

この西方にある早良平野の東縁には、東が福岡平野との境を画する平尾丘陵に、また西方を飯倉丘陵によって阻まれたひとつのまとまりがあり、小地域を形成している。ここには油川の北麓から派生した細長い低丘陵が数筋ものび、この間を縫うように樋井川や一本松川、片江川、駄ヶ原川等の小河川がこれらの丘陵を開析して小さな沖積地を形成し、やがては樋井川とひとつの流れになって博多湾に注いでいる。この樋井川水系の小流域が、「和名類聚抄」に記された早良郡田比伊郷に比定される地域である。

長尾遺跡は、油川の北麓から派生して北へのびる標高30mの低平な上長尾丘陵のほぼ中央に位置し、その北には標高100mの鴻ノ巣山を中心とする平尾丘陵が続いている。この上長尾丘陵は、古第三紀層を基盤層とし、その東縁には樋井川が、また西縁には一本松川が北流し、その開析作用によって流域には小さな沖積地を作っている。

この樋井川流域における遺跡の初源は旧石器時代で、カルメル修道院内遺跡や五ヶ村池遺跡、神松寺遺跡等から尖頭器やナイフ形石器がわずかに出土している。

縄文時代には、大牟田遺跡や柏原遺跡、箱ノ池遺跡、駄ヶ原遺跡、笹栗遺跡等がある。このうち、大牟田遺跡では、前期の条痕文土器の包含層が調査され、块状耳飾り等が出土している。柏原遺跡では、早期の押型文土器や石斧、石匙等が出土している。また、笹栗遺跡では、包含層から晩期の条痕文土器や石鎌が出土しているが、いずれも遺跡は生活空間としては油山の北麓域に限られ、沖積地への進出は認められない。

弥生時代になると沖積地中に独立する丘陵上に広く展開する。樋井川左岸域には神松寺遺跡、淨泉寺遺跡、カルメル修道院内遺跡があり、前期末～中期に造営された壇場墓地が調査されている。このうちカルメル修道院内遺跡の前期の木棺墓には鍛錬が副葬されていた。また淨泉寺遺跡では、前期末～中期初頭の袋状貯藏穴や中期～後期の堅穴住居跡等が検出されている。中期になると遺跡は飛躍的に増大し、樋井川上流域の長尾丘陵へと拡がっていく。上長尾丘陵の中央に中期の標識的集落遺跡として著名な宝台遺跡があり、その西には中期後半の甕棺墓に前蓋鏡を副葬した丸尾台遺跡がある。後期になると、樋井川右岸に御子神社遺跡や小塙遺跡等がある。御子神社遺跡の箱式石棺墓からは鏡の山上が伝えられ、小塙遺跡では後期前半の石蓋土壙墓に鉄鎌が副葬されていた。このように弥生時代を通観すると、前期初頭に遡る遺跡ではなく、前期末に至って金山東麓の丘陵部から長尾丘陵の北端部に展開し、福岡平野との境をなす南東域の桧原から屋形原にかけては立地しない。このことは弥生文化が早良平野を経て導入され、漸次南進したことを意味しよう。次に、中期には開析された谷水田の開発と相俟って主体は長尾丘陵へと移行し、甕棺墓に内行花文鏡や素環頭鉄刀を副葬する丸尾台遺跡を核として政治的、地域的な結合を示し、後期の御子神社遺跡や小塙遺跡の墳墓群の被葬者へと継承されていく。

古墳時代になると淨泉寺遺跡や田島小律遺跡、片江辻遺跡等があり、堅穴住居跡等が調査されているが、前時代からつづく遺跡は希薄で、歴史的過程はきわめて不透明である。墳墓としては、樋井川



左岸の丘陵頂部に京ノ隈古墳と一本松川左岸の神松寺丘陵上には神松寺御陵古墳がある。京ノ隈古墳は、粘土塚内の割竹式木棺を埋葬主体とした4世紀末の前方後方墳であり、神松寺御陵古墳は横穴式石室を内部主体とする6世紀後半の前方後円墳である。桶井川流域では、この2墳を頂点とするが時間的な隔絶が著しく、その空白域は早良、福岡平野との政治的、経済的基盤の関わりの中で把握することが必要であろう。6世紀後半～7世紀にかけては、油山北麓域にいわゆる群集墳の形成がみられる。古墳は、横穴式石室を内部主体とする直径が10m程の円墳で、大牟田古墳群、片江古墳群、倉瀬戸古墳群、瀬戸戸古墳群等があり、その数は後に100基を越えている。また、これら古墳の供獻遺物としてスラッグがあり、沖積地における水田耕作とともに経済的基盤として鉄生産が開始されたことを裏付けている。しかし、海岸砂丘に面した平野部の生産活動に比べて発展性に乏しい。

古代～中世では、奈良時代の製鉄遺跡である笠栗遺跡と平安時代末の京ノ隈遺跡の経緯があり、柏原遺跡では元寇の慰賞地として付与されたや鎌倉時代の館跡が調査されている。

一方、長尾遺跡を中心に長尾丘陵を臨むと、丘陵北端の下長尾には弥生時代前中期の油山遺跡と本村遺跡が、上長尾に長尾遺跡がある。このうち本村遺跡では金海式の甕棺墓が確認されている。中期に至ると5棟前後を単位とする集落とその甕棺墓地からなる宝台遺跡が南にあり、更にその西には中期後半の甕棺墓に内行花文鏡と刀子や素環頭鉄刀を副葬する丸尾台遺跡がある。後期にはその東側の桶井川に面した丘陵上に鬼の木遺跡、八六宮遺跡、御子神社遺跡が、下長尾には小笠遺跡があり、御子神社遺跡の箱式石棺蓋には鏡が、また小笠遺跡の石蓋土壇蓋には鉄鑄が副葬されていた。これは桶井川水系を基盤として結合した地縁的な集団の首長層として捉えることができ、長尾丘陵を核として地域的、政治的な統合が図られ、継承されていったことを想起させる。

2. 周辺の調査

長尾遺跡のある桶井川流域は、近年までは都市近郊の田園地帯が拡がっていた。それ故か知見される遺跡は、昭和2(1927)年に水野清一、島田貞彦によって調査された片江遺跡や昭和38(1963)年に発見された丸尾台遺跡のほかは詳細が明らかではなかった。しかしながら、昭和40年代以降は人口の増加に伴って宝台団地を初めとする大型団地の造成が相次ぎ、低丘陵上から沖積地は急速に宅地化している。これによって宝台遺跡や神松寺遺跡等が調査され、福岡平野と早良平野の狭間に位置する桶井川流域の様相は次第に明らかになりつつある。

宝台遺跡（1969年10月～12月） 福岡市城南区桶井川四丁目(註1)

油山から派生して桶井川に沿ってのびる低丘陵のほぼ中央部にあり、尾根を挟んだ西側には丸尾台遺跡がある。遺跡は、南北に細長い低丘陵から東側に突出した小支丘上に立地し、この小さな支丘上に3グループからなる弥生時代中期の竪穴住居跡15軒、甕棺墓15基と祭祀遺構を検出し、弥生時代の集落と墳墓研究の指標的遺跡となっている。

丸尾台遺跡（1963年5月） 福岡市城南区桶井川四丁目(註1)

油山の北麓から北に向かって枝葉状に細長くのびる低丘陵の中央部西端に位置する。採上工事中に発見された甕棺墓遺跡で、崩落した弥生時代中期後半の甕棺墓には朱塊とともに内行花文日光鏡3面と鉄刀子1口が副葬されていた。更に後期初め（？）の甕棺墓からは副葬された素環頭鉄刀が検出されている。

笠栗遺跡（1969年9月～10月） 福岡市城南区桶井川六丁目(註2)

油山北麓の小丘陵に囲まれた旧横内池畔に立地し、縄文時代晚期から古代までの遺物が含まれて



Fig.3. 長尾道路位置図 (1/5,000)

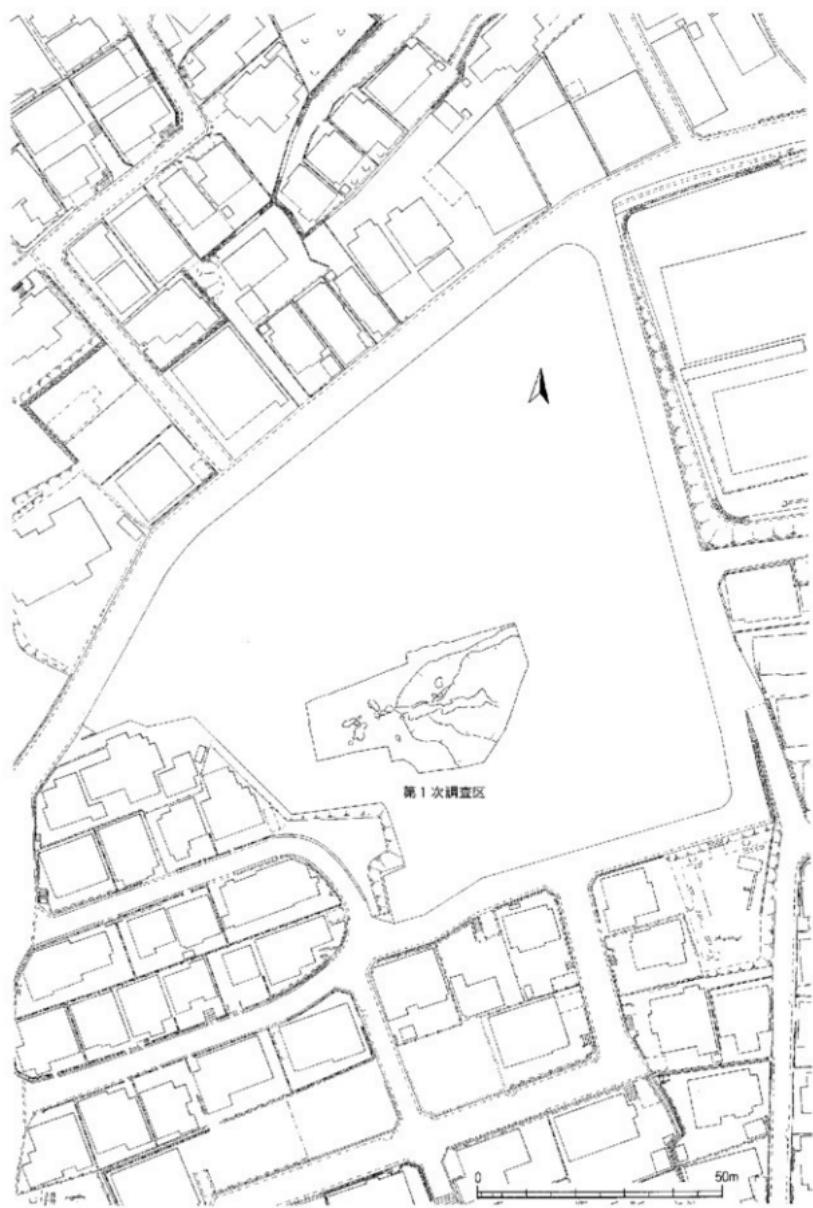


Fig.4. 第1次調査区周辺概況図 (1/1,000)

いる。丘陵の緩斜面上から奈良時代の長方形炉と円形炉の2基の製鉄遺構が検出された。

小笠遺跡（1972年4月～6月 1973年8月～10月）福岡市城南区長尾二丁目(註3・4)

鴻の巣山を中心とする平尾丘陵の南側から派生する小丘上に立地し、2次に亘って調査された。

1次調査では、小丘の尾根に沿って弥生時代後期前半の石蓋土壙墓6基、土壙墓1基とそれに伴う祭祀土壙が検出された。この内4号石蓋土壙墓には鐵鏺が副葬されていた。また、2次調査では丘陵の斜面に沿って2条の溝が検出され、溝内には弥生時代後期前半の土器が多く投棄されていた。

京ノ隈古墳（1974年8月～9月）福岡市城南区田島三丁目(註5)

金山より派生した支丘の頂部に立地する4世紀末の前方後方墳で全長は約49mである。埋葬主体部は、後方部の中央に全長5.86mの粘土廓で、廓内には割竹式木棺が安置され、赤色顔料の敷かれた棺内には鐵劍1、鉗1、鉄製鋤先1が副葬されていた。また、古墳上には12世紀前半の経塚2基があり、1号主体部の外容器の蓋には黄褐色鉄絵花文大盤が使用されていた。

神松寺遺跡（1977年5月～6月）福岡市城南区神松寺一丁目(註6)

金山丘陵からのがた低丘陵の東南端頂部に立地する。弥生時代後期の豊穴住居跡が20棟検出されており、その上面には神松寺御陵古墳が構築されている。

神松寺御陵古墳（1970年5月 77年5月～6月）福岡市城南区神松寺一丁目(註5・6)

金山丘陵よりのがた低丘陵の東南端頂部に立地する6世紀中葉～後半の前方後円墳である。墳丘は丘陵先端の最頂部を地山整形して構築され、全長20m、後円部径15m、前方部長7m、前方部幅は15mと小型である。埋葬主体部は、全長4.4～4.7mの複室の横穴式石室で、後円部のほぼ中央部にあり、南側に開口する。石室内には耳環や玉類の装身具、直刀や鐵鏺等の武具、刀子や馬具等の外に須恵器が副葬されていた。

淨泉寺遺跡（1972年5月～6月 1981年6月～10月）福岡市城南区神松寺三丁目(註7・8)

油山から派生する金山丘陵の東南端に位置し、2次に亘って調査された。丘陵の南側の第1次調査では、丘陵の尾根上から平坦地に弥生時代前期後半～中期初頭の袋状貯藏穴46基と中期～後期の豊穴住居跡5棟が3群に分かれて拡がっていた。また、緩斜面上には古墳時代前期の豊穴住居跡2棟が占地していた。一方、丘陵北側の第2次調査では、弥生時代前期後半の袋状貯藏穴31基、中期の豊穴住居跡1棟、小堀型棺墓3基と古墳時代の豊穴住居跡19棟、掘立柱建物跡8棟が丘陵の頂部～北側の緩斜面で検出されている。

カルメル修道院内遺跡（1972年11月～73年4月）福岡市城南区神松寺三丁目(註5・9)

油山に発する樋井川に沿って細長くのがたる低丘陵の南端に立地し、北には淨泉寺遺跡や神松寺遺跡がある。1972年以来4次に亘って調査され、弥生時代前期～後期初頭の甕棺墓と土壙墓からなる墳墓群が検出されている。この内第2次調査では前期末の金海式甕棺墓に切られた木棺墓に3個の錫銅が副葬されていた。

(註 1) 宝台遺跡 1970 日本住宅公團

(註 2) 菊池古代製鉄遺跡 1969 福岡市土地開発公社

(註 3) 小笠遺跡 1973 福岡市埋蔵文化財調査報告書第25集

(註 4) 小笠遺跡－第2次調査－ 1975 福岡市埋蔵文化財調査報告書第34集

(註 5) 京ノ隈古墳 1976 沢谷地所開発株式会社

(註 6) 神松寺遺跡 1978 福岡市埋蔵文化財調査報告書第45集

(註 7) 淨泉寺遺跡 1974 東洋開発株式会社

(註 8) 淨泉寺遺跡－遺構編－ 1983 福岡市埋蔵文化財調査報告書第99集

(註 9) カルメル修道院内遺跡Ⅱ 1992 福岡市埋蔵文化財調査報告書第299集

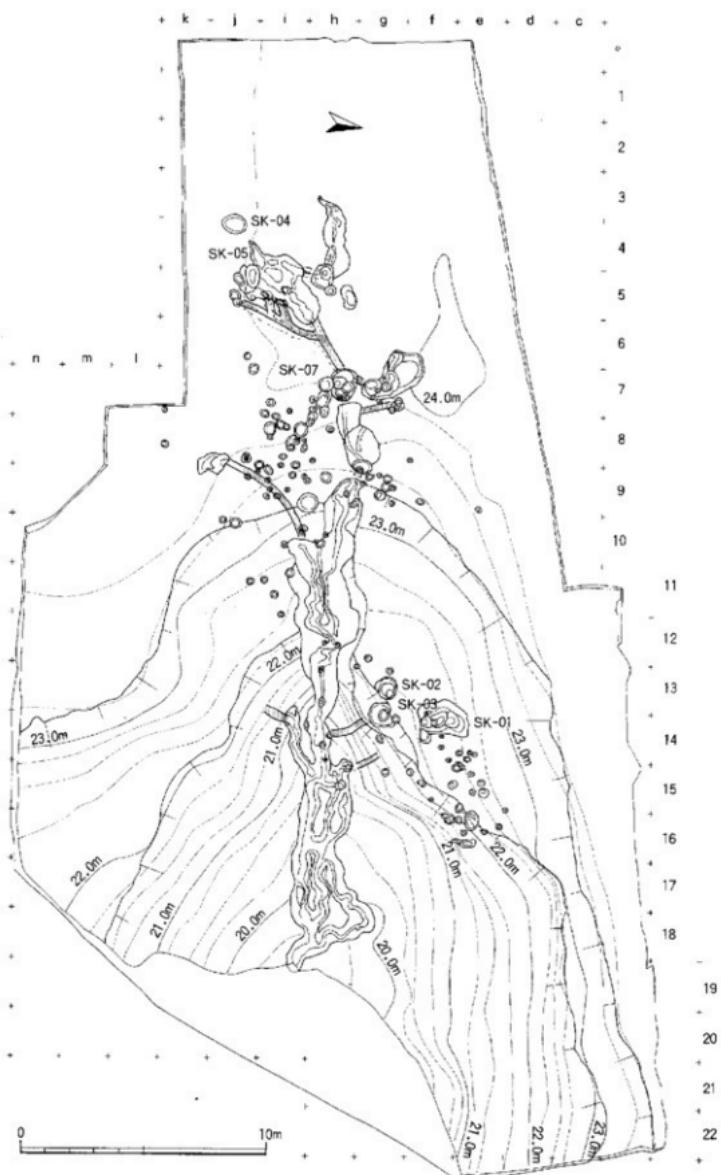


Fig.5. 第1次調査区遺構配置図 (1/200)

III. 調査の記録

1. 調査の概要

福岡市の西部に拡がる早良平野の東縁には、油山から派生する平尾丘陵と飯倉丘陵によって画された小さな沖積地が開けている。この沖積地は油山の北麓に源を発する樋井川や一本松川、駄ヶ原川、片江川の開析によって形成され、その流域の丘陵上には弥生時代から古墳時代の遺跡が多く立地している。

この小さな沖積地の中央には、油山北麓の駄ヶ原から横内、野添、下長尾へとづく標高30mほどの低平な丘陵が細長くのびており、長尾丘陵と呼称されるている。この丘陵の東縁には樋井川が、西縁には一本松川が北流し、その両縁には開析による谷の貫入が隨所に観られる。長尾遺跡はこの長尾丘陵のほぼ中央部に位置し、浅い谷を隔てた南方には弥生時代中期の集落とその集団墓からなる宝台遺跡が対峙している。

長尾遺跡第1次調査区は、足下に樋井川を臨む丘陵の東側緩斜面上に立地し、その東側には開析作用によって形成された谷が貫入しており、近世までは灌漑用水池としての役割を果たしていた。試掘調査の所見によれば、調査区の北側は既設住宅の建築に際して大きく削平され、遺構はまったく存在しなかった。一方、調査区の南東部にはヘドロ層の堆積した谷部があり、その谷奥の上縁部にあたる西側からは暗褐色～黒褐色土を覆土とする土壤やビットが検出された。これによって発掘調査は、この谷の上縁部を中心とする約1,000m²をその対象範囲として実施した。

発掘調査は、周辺域の造成と配管工事の完了した敷地内で、本体の建築工事と同時進行で実施することとなった。調査は、はじめに西側の丘陵部から表土層の除去をはじめ、順次東側の谷部へとすすめた。丘陵上には縱横に巡る上下水道の配管と廃材の廃棄場があった。また、調査区の東半部にある谷には1~1.8mの盛土とその下層にはヘドロ層が堆積しており、ここまでをパワーショベルで除去して谷底面の調査にあたった。

その結果、谷を巡る丘陵上からは7基の土壙やビットと不整形をした流水路の流入口を検出した。この流水路は幾つかの流入口からの流れを集めて谷へと続いていた。また、この谷のヘドロ層下には(1)暗茶褐色土、(2)灰褐色土、(3)灰青褐色土が互層をなして堆積し、その中には弥生時代中期後半を主体とする土器が下層ほど厚く混入していた。殊に谷底面からは壺や器台の完形品がまとまって出土し、明らかに自然の流入とは異なる様相を示していた。

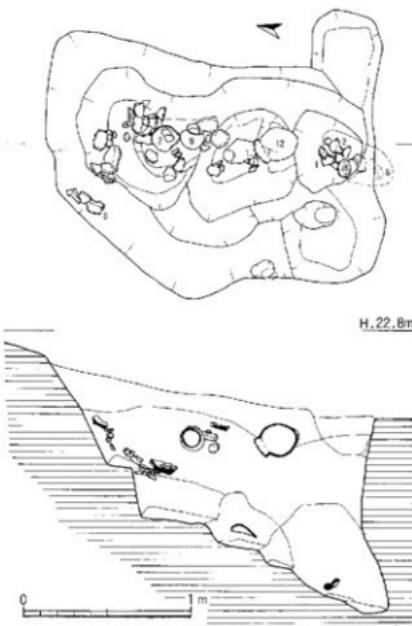


Fig. 6. 1号土壤実測図 (1/30)

2. 調査の記録

1). 土 壤

上壤はすべてで7基を検出した。これらの上壤は、調査区の東側に貫入する谷の上縁側(SK-04~07)と北側の緩斜面上(SK-01~03)の二つに分かれて拡がっている。このうち北側の緩斜面上に立地する一群は隣接して分布するが、谷の上縁に拡がる一群は疎らな分布を示し、その間に何らかの有機的な関連性を有するとは察しがたい。平面的には、円~橢円形プランと不整形なものがある。その機能としては6号上壤が焼上壤であり、7号上壤が墳墓の可能性を示すほかは明らかでない。また、1~3号土壌は流水路の可能性も否定できない。

1号土壌 SK-01 (Fig.6, PL.3)

調査区の東に貫入している谷の北側緩斜面上に立地する大型の上壤で、南側下縁の谷際には2、3号土壌が並置している。平面形は長幅200cm、短軸125~155cmの不整形な長方形プランを呈し、谷に直交する南北位のN-9°-Wに主軸方位をとる。壁面は緩やかに傾斜して立ち上がるが、南壁は急峻で下半部は谷にむかって抉れ込んでいる。壇底は5段の小さなフラット面を造りながら北から南へむかって階段状に緩やかに傾斜し、その南端部は小さくトンネル状に抉れ込んでいる。この南端部には黄褐色粘質土がブロック状に堆積していたために壇底としたが、その形状からして流水路状をなすことも考えられよう。上縁部からの深さは65~150cmで、壇底の比高差は85cmある。覆土は上~中層が暗茶褐色~濃灰褐色粘砂土が、下層には濃灰褐色粘質土が堆積していた。遺物は弥生土器から上層器までが混在していた。

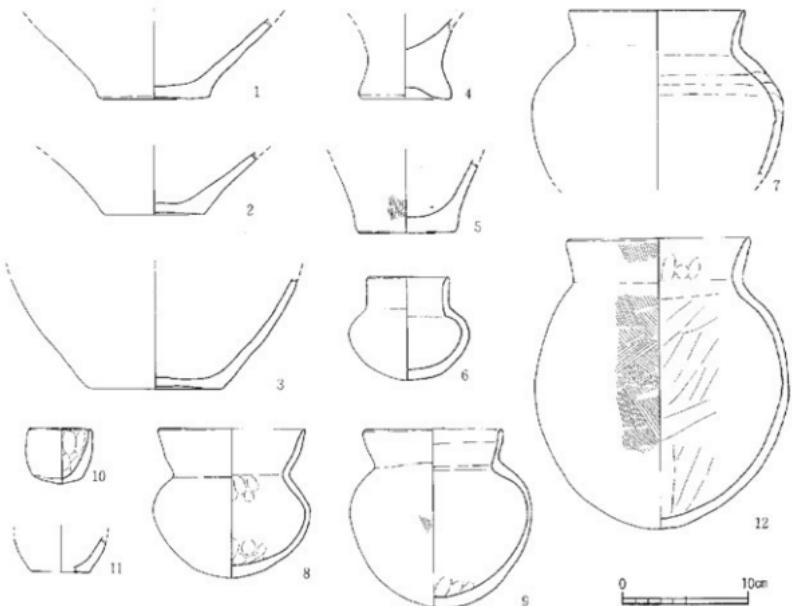


Fig.7. 1号土壌出土土器実測図 (1/4)

出土遺物 (Fig.7. PL.14)

1.2は壺である。1は底径8.8cm、2は底径8cmで、外面には丹塗り痕がある。内外面ともナデ調整。胎土は良質で、細砂粒、雲母、赤褐色粒を含む。3は底径10.8cm。4は中期前半の甕で、底径は7.3cm。厚い底部は上げ底状をなす。調整はナデ。5は底径7.8cmで、外面はハケ目調整。6~9丸底壺である。6は口径6.5cm、器高は8.1cm。口縁部は直口して立ち上がり、胴部は扁球形をなす。7は口径が14cm。口縁部は小さく外反し、胴部はやや肩が張る。内面には明瞭な粘土の繼目痕がある。8は口径11.6cm、器高は11.9cm。口縁部は小さく膨らんで外反し、胴部は扁球形をなす。9は口径11cm、器高14.3cm。外反する口縁部は端部が小さく直口し、胴部は肩の張った球形をなす。いずれもナデ調整し、内底面には指頭押圧痕が残る。10.11はミニチュア土器。10は口径4.9cm、器高は4.4cmで、鉢形をなす。体部は内弯気味に立ち上がり、口縁部は小さく内傾する。内面は指頭押圧、外面はナデ調整。12は口径14.6cm、器高23cmの土師器甕。口縁部は小さく外反し、胴部はやや長胴形をなす。外面はハケ目、内面は粗いナデ調整。

2号土壤 SK-02 (Fig.8. PL.4)

調査区の東側に貢入する谷北縁の緩斜面上にある土壤で、3号土壤のすぐ西に位置している。平面形は、長径90cm、短径75cmの円形プランを呈し、主軸を東西位にとる。壁面は垂直に立ち上がるが、西壁は検出面から35cmと115cmのところに小さなフラット面を造り、階段状をなす。また、東壁は中程で袋状に抉り込んでいる。浅い凹レンズ状の壙底までは深さは133cmを測り、井戸状をなす。覆土は上層が砂粒を含んだ濃灰黒色土で、下層は茶褐色の粘質土である。

3号土壤 SK-03 (Fig.8. PL.4)

調査区の東側にある谷の北側緩斜面に立地する土壤で、2号土壤のすぐ東に並置している。平面形は長径110cm、短径85cmの梢円形プランを呈し、東西位に主軸方位をとる。壁面は中位までは緩やかに傾斜し、その後壙底までは垂直に窄まり井戸状の構造を示す。壙底は浅い凹レンズ状をなし、深さは135cmを測る。覆土は上層が灰黒色土、下層が茶褐色土が堆積していた。遺物は甕等の弥生土器片

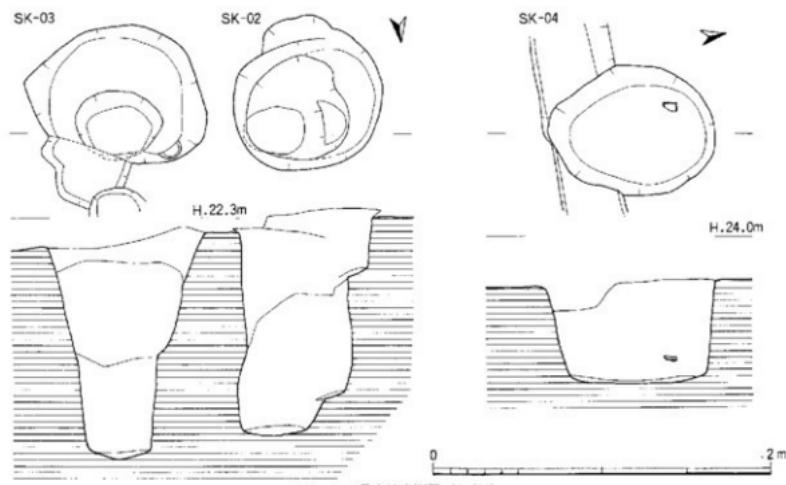


Fig.8. 2~4号土壤実測図 (1/30)

が少量出土した。

出土遺物 (Fig.10. PL.14)

13は底径9.4cmの壺で、内外面ともナデ調整。胎土には石英小砂粒と雲母を含み、色調は淡黄橙色。**14**は底径11.7cmの器台である。筒状にのびる脚部は薄く、裾部はラッパ状に短く開く。内外ともナデ調整。胎土には多くの砂粒と少量の雲母を含む。色調は明赤橙色。

4号土壙 SK-04

(Fig.8. PI.4)

谷の上縁部に立地する小型の土壙で、5号土壙の西方2mの距離に位置する。平面形は、長軸97cm、短軸77cmの楕円形プランを呈し、主軸方位を東西軸のN-7.5°-Eにとる。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は

60cmを測る。壇底は中央部がわずかに凹み、箱形の断面形をなす。覆土は砂粒を含んだ濃灰褐色～暗茶褐色土で、遺物はほとんど含んでいない。

5号土壙 SK-05 (Fig.9. PL.5)

谷の上縁部に立地する小型の土壙で、4号土壙の東へ2mの距離にあり、1号流水路(SX-01)よりも新しい。平面形は、長軸95cm、短軸56cmの楕円形プランをなし、主軸をN-85°-Eの東西位にとる。深さ28cmの壁面は緩やかに立ち上がる。壇底は浅い凹レンズ状で、断面形は浅い舟底状をなす。覆土は淡灰黒色～灰褐色土である。遺物は甕や器台が小口部に沿って出土した。

出土遺物 (Fig.10. PL.14)

15.16は甕である。**15**は底径6cmで、上げ底気味の厚い底部内面には炭化様の黒色物が付着している。胎土は砂粒を多く含み、色調は明赤褐色。**16**は底径10cmで、胴部は倒卵形に立ち上がり。胎土には多くの砂粒と雲母、赤褐色粒を含む。淡黄橙色。**17**は口径9cm、底径10cm、器高13.3cmの器台である。口縁部は細くラッパ状に外反し、厚い底部は短く開

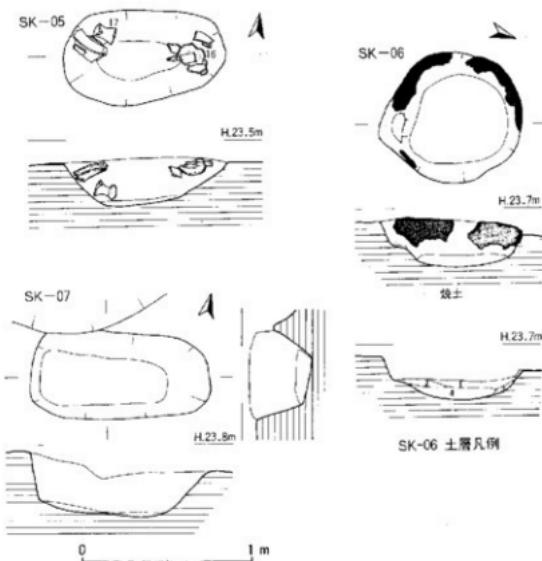


Fig.9 5~7号土壙実測図 (1/30)

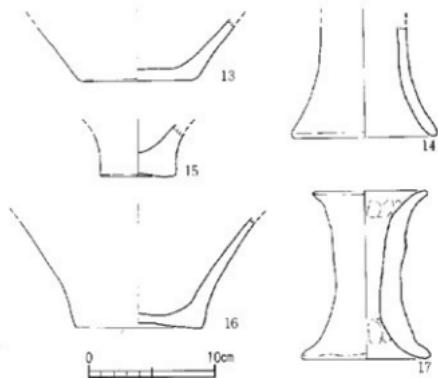


Fig.10. 3-5号土壙出土土器実測図 (1/4)

く。内外面とも押圧ナデ調整。胎土は粗く砂粒、雲母を含む。色調は赤橙色。

6号土壤 SK-06 (Fig.9. PL.5)

調査区の東側に貫入する谷の上縁部に立地する焼土壤で、谷頭部の埋没後に掘り込まれている。西方4mの距離には7号土壤がある。平面プランは直径が77~86cmの円形を呈する。深さ約30cmの緩やかに立ち上がり、南壁の中位には小さなフラット面を造る。このフラット面より西側の上壁には厚さ1~2cmほどのよく焼けた焼土壁が残っていた。また、浅い凹レンズ状をなす底には、炭片と灰層からなる黒色土が5~8cmほどの厚さで堆積していた。遺物は土器小片がわずかに出土した。

7号土壤 SK-07 (Fig.9. PL.6)

調査区の東側に貫入する谷の上縁部に立地する土壤で、東方4mの距離には6号土壤がある。平面形

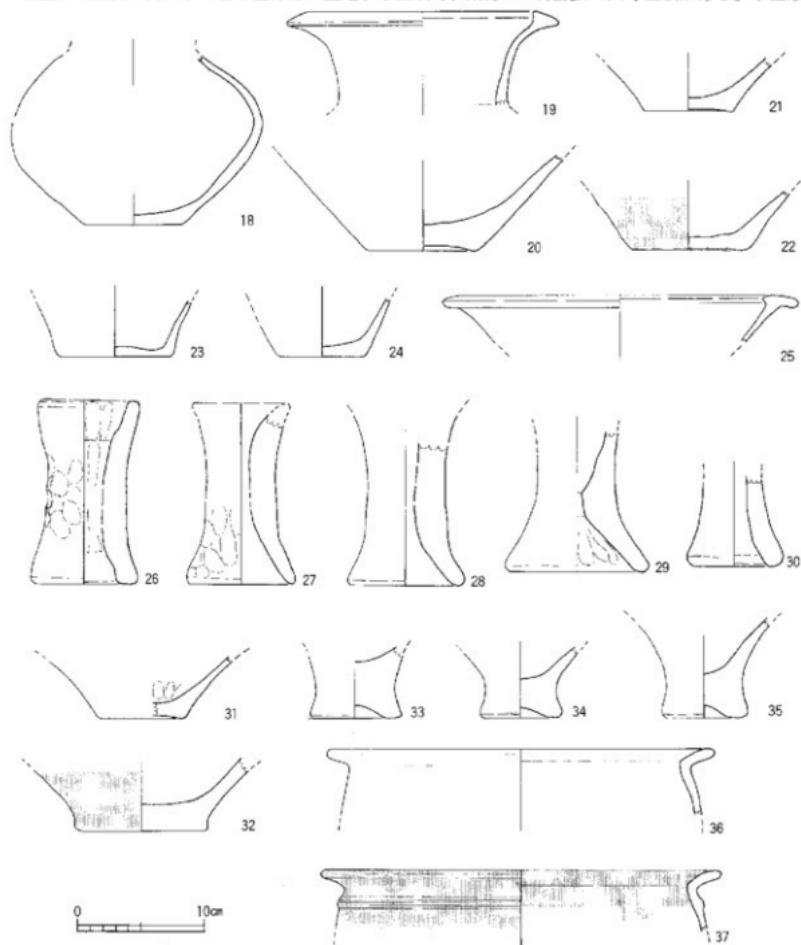


Fig.11. 1・3~8号流路出土土器実測図 (1/4)

は、長軸106cm、短軸52cmの長方形プランを呈し、主軸方位をN-81°-Eの東西位にとる。壁面は西側小口部が急峻なほかは緩やかに立ち上がり、深さは30~35cmを測る。墳底はほぼ平坦であるが、西から東へむかって緩やかに傾斜している。覆土は暗黄茶褐色土で、遺物は1点も出土していない。

2). 流水路

調査区の東側には小さな谷が貫入しており、それを開む三方からはなだらかな斜面が谷へむかって続いている。この斜面上には砂粒を含んだ暗茶褐色土~黒褐色土を覆土とする不整形な土壙が幾つかある。これらの土壙は平面形や断面形等には規則性がないが、墳底が溝状をなして西から東へ或いは南から北へと傾斜し、更にそれは壁面を作ることなく深くトンネル状に続いている。このトンネル状の空間は幅が30~50cm、高さは50~100cmほどあり、幾つが空間が二筋にまとまって谷奥(谷頭)へと繋がり、更に谷底の溝へと続いている。これらのことから緩斜面上の不整形土壙は山水の流入口、トンネル状の空間はその流水路として想定した。

1号流水路 SX-01 (Fig.5, PL.8)

調査区の南北に位置する流水路の流入口で、南西から北東へ流れる。流路は墳中央の盛上がりを離れて東西に分流する。西側の流路はその北端で5号流水路(SX-05)と合流して東折し、更に東側の流路に合流して北東へ流れ、7号流水路(SX-07)へと繋がる。また、東側流路の東壁には3ヶ所に横穴状の小流路が分流しているが、これらも合わせて7号流水路(SX-07)方向へ繋がるものと考えられる。

出土遺物 (Fig.11.12, PL.14~18)

18~22は壺である。18は細頸壺の胴部で、底径は7.8cm。肩の張る扁球形の胴部は最大径19.8cmを測る。内面は指頭押圧ナデ。胎土は良質で、淡橙色~白橙色。19は鋤先口縁壺で、口径21.6cmを測る。口縁部は直口気味に立ち上がる頸部から短く外反し、内唇の小さく張り出した口縁端部は外傾する。胎土には砂粒と雲母を含み、外面は明橙色、内面は淡黄橙色。20は底径が8.8cmで、内面には炭化物様の黒色物が付着している。21は底径7cm。22は底径9.2cm。23・24は甕である。23は底径9cm。24は底径6.8cm。胎土はやや粗く細~中砂粒を多く含み、内面は押圧ナデ調整。25は口径28cmの丹塗り高环である。鋤先状の口縁部はやや外傾し、内唇は小さく張り出す。体部は浅い半球形をなす。胎土には石英砂を含む。26~30は器台である。26は口径8cm、底径8.4cm、器高は14.6cm。受け部は筒状の体部から小さく外反し、脚部は小さく屈曲して直口する。器肉は厚く、端部は上下とも平坦に整える。明赤褐色。27・28は厚い筒状の体部が細く、受け部が短く脚部が緩やかに外反するものである。27は底径8.6cmで、淡黄褐色。28は底径9.3cmで、明赤褐色。29は底径11.4cm。脚部は屈曲してストレートに外反する。色調は明赤褐色。30は底径7.5cmを測り、脚部は小さく外反する。色調は赤橙色。調整はナデ~指頭押圧ナデ。

38~39は石包丁である。38は三角形状を呈するもので、幅は7.2cm、背厚は5mmで長さは16cmに復原できる。両刃の刃面は明瞭に研ぎ出し、背部はやや内弯気味になる。体部の中央に内径5mmの孔を穿っている。39は半月形をなす石包丁である。両刃の刃面は研ぎがやや緩く、背部はストレートである。頁岩質。40は

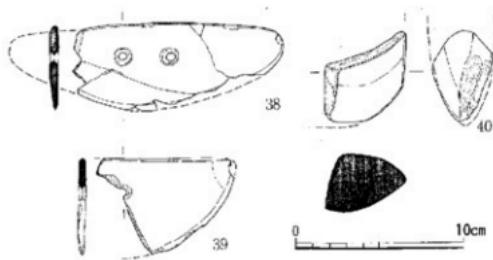


Fig.12. 1号流水路出土石器実測図 (1/3)

玄武岩の大型蛤刃石斧の刃部である。

2号流水路 SX-02 (Fig.5)

調査区の中央部南寄りに位置する流水路の流入口で、調査区の中央部を東流する1~7・8・9号流水路(SX-01~07・08・09)とは異なる谷奥部南側の流水路に注ぎ込むものと考えられる。

3号流水路 SX-03 (Fig.5)

調査区の中央部北側に位置する流水路の流入口で、南流して7号流水路(SX-07)に繋がり、更に8・9号流水路(SX-08・09)を経て谷奥部の北側の流水路へ続くものである。

出土遺物 (Fig.11)

31~32は壺である。31は底径6.8cmの丹塗り壺である。内面はナデ、外面は研磨状のナデ調整。胎土は良質で、細~小砂粒と雲母を含む。32は底径10.5cm。胎土はやや粗く、色調は白橙色。

5号流水路 SX-05 (Fig.5)

調査区の西側に位置する流水路の流入口で、東西に細長い。流路は初めて東流し、その東端で南折して1号流水路(SX-01)の西側流路へと繋がる。南折する流路の屈曲部には、北東方から6号流水路(SX-06)が流れ込んでいる。

出土遺物 (Fig.11)

33~35は中期前葉の甕である。上げ底の底部は厚く、胴部は倒卵形に立ち上がる。33は底径7.1cmで、乳灰色。34は底径6.4cmで、淡黄橙色。35は底径6.8cmを測り、淡黄橙色~赤橙色。34の外面にはハケ目痕がある。胎土には石英砂と雲母粒を含む。

6号流水路 SX-06 (Fig.5)

調査区の北西部に位置する流水路の流入口で、5号流水路(SX-05)のすぐ北東にあ。流入口は小さな楕円形を呈し、流路は南西へ流れて5号流水路(SX-05)の東壁へ注ぎ込んでいる。

出土遺物 (Fig.11)

36は口径30.6cmの甕である。口縁部は逆L字状をなし、胴部は倒卵形をなす。口縁部下には煤様の黒色物が付着している。胎土は良質で石英砂を含み、色調は淡黄褐色。

7号流水路 SX-07 (Fig.5)

調査区の中央部を東流する流水路で、北壁には3号流水路(SX-03)が、また西壁には1号流水路(SX-01)が注ぎ込み、合わせて8・9号流水路(SX-08・09)を経て谷奥部の北側の流水路へと繋がっている。本壙は流入口ではなく、流水路の天井部が陥没してそこへ覆土が流れ込んだものである。

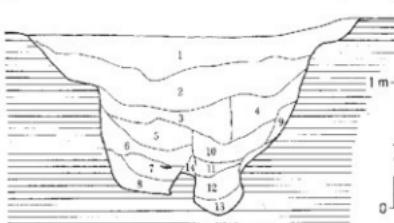
8号流水路 SX-08 (Fig.5)

調査区中央部の谷奥部近くにある流水路の陥没地で、西は1~7号流水路(SX-01~07)から続き、9号流水路(SX-09)を経て谷奥部北側の流水路へと繋がっている。

出土遺物 (Fig.11)

37は口径31.6cmの丹塗り甕で、逆L字状の口縁部下には1条のM字凸帯が巡る。胎土は良質で細~小砂粒を含む。

H. 22.9m



1. 淡青色粘土 粘土質多く含む。細い
に走る赤褐色 褐色土層で淡褐色粘土質土
ブロックを含む
2. 淡褐色粘土ブロック 砂砂利・淡褐色粘土
層が混入。砂利はやや多め
3. 淡褐色粘土 泥層に大きなものが混入する
事はない
4. 淡褐色粘土 (砂利よりも明るい) 砂質土質上
ロゴック状の砂利は含み少ない
5. 淡褐色粘土 (砂利は含まない)
6. 淡褐色粘土質 地盤はやや硬く
7. 淡褐色粘土層 (砂利は含まない)
8. 淡褐色粘土上 ブロック層
9. 淡褐色粘土ブロック 砂砂利・淡褐色粘土
層が混入。砂利はやや多め
10. 淡褐色粘土質 地盤はやや硬く
11. 淡褐色粘土 地盤はやや硬く
12. 淡褐色粘土 地盤はやや硬く
13. 淡褐色粘土 黒褐色ぎみて酸性物質少ない
14. 淡褐色粘土 ブロック層に混入する
地盤に混入する

Fig.13. 谷頸土層断面実測図 (1/40)

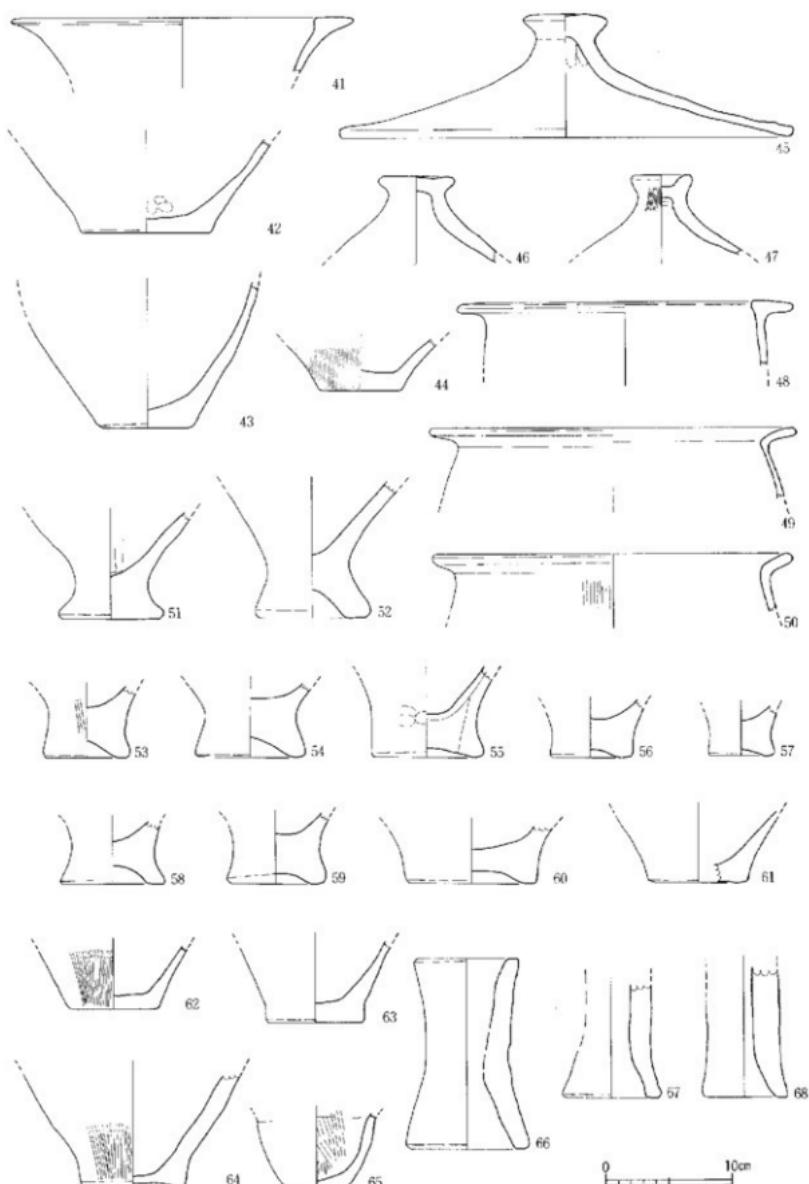


Fig.14. 谷上層出土土器實測圖 1 (1/4)

3). 谷

調査区の東側には、開拓された小さな谷が貫入していた。この谷の最深部には流れによって形成された細い溝があり、谷奥には上縁の流水路(SX)から注ぎ込んだトンネル状の流路が繋がっている。近世期には北東方の開口部に堰堤を築いて灌漑用水池としており、住宅造成時の客土下にはヘドロ層が堆積していた。このヘドロ層下には(1).暗茶褐色土、(2).灰褐色土、(3).灰青褐色土が層状に堆積し、この土層中には弥生土器や石器等が含まれていた。そこで(1)暗茶褐色土層を上層、(2)灰褐色土層を下層、(3)灰青褐色土層を最下層として区分し、遺物を各層ごとに取り上げた。遺物は上層が薄く、谷底の最下層からは完形の壺や器台等が投棄された状況で出土した。

上層の出土遺物 (Fig.14.15.28.29. PL.14・18)

41～44は壺。41は鋸先状口縁の壺で、口径は27cm。緩やかに外反する口縁部は端部を水平に整え、内唇の張り出しが弱い。胎上には細～粗砂粒が多く含み、淡黄橙色。42は底径10.2cm。内底面には指頭押圧痕が明瞭に残る。胎土は細～小砂粒が多く含み、浅橙色～浅緑灰色。43は底径7cmで、長卵形の胸部をなす。内面は洗いナデ。44は底径6cmの舟乗り壺。内面はナデ、外面は研磨状のナデ。

45～47は蓋である。45は口径36.2cm、天井部径6.6cm、器高は9.8cm。体部は大きくストレートに外反し、天井部は外縁を凸円様に摘み出す。調整は天井部が指頭押圧ナデのほかはナデ。46は天井部径が6.1cm。天井部は外縁を摘み出し、体部は緩やかに広がる。天井部は指頭押圧ナデ。47は天井部径4.8cm。天井部は外縁を上方に摘み上げ、体部は緩やかに外反する。天井部はナデ、外面はハケ目。

48～64は甕。48は口径26.8cm。逆L字状の口縁部は上唇を水平に整えている。口縁部下には煤様の黒色物が付着している。49は口径29cm。口縁部は逆L字状を呈し、胴部は倒卵形をなす。50は口径28.6cmである。口縁部は如意状に小さく曲げて逆L字状をなす。外面はハケ目、内面はナデ。51～59は中期前葉の甕。底部は小さく縮まって上げ底状をなす。底径は5.3～9.2cm。外面はハケ目、内面は押圧ナデ調整。57の内底面には炭化物が付着している。60～64は中期中葉の甕。60は底径10.2cmで、底部はやや厚く上げ底状をなす。61～64は底径が7～8cmである。外面はハケ目、内面は押圧ナデ調整。

65は底径が4.8cmの小型の鉢である。体部は緩やかに膨らんで立ち上がり、口縁部は小さく外反する。外面は粗いナデ、内面は縦ハケ目。胎土は細～中砂粒を含む。

66～68は器台である。66は口径8.3cm、底径9.7cm、器高は15.1cmを測る。受け部は体部から小さく外反し、脚部は屈曲してストレートに聞く。端部は平坦に整えている。内外面とも指頭による押圧ナ

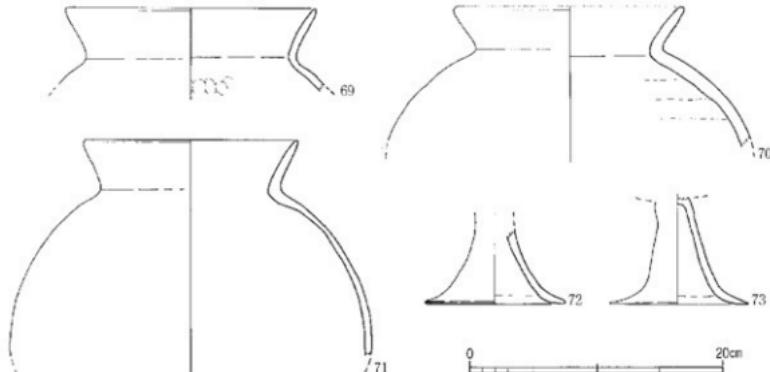


Fig.15. 谷上層出土土器実測図 2 (1/4)

デ調整。胎土は粗く多くの細～中砂粒と雲母を含み、明赤橙色。**67**は底径7.8cm。脚部は筒状の体部から小さく屈曲してストレートに直口し、端部は平坦に整える。胎土は粗く小砂粒を多く含む。**68**は底径6.5cm。脚部は厚く細い筒状の体部から小さく外反する。内面は押圧ナデ調整。胎土には少量の細～粗砂粒を含む。内面は暗赤褐色、外面は黄橙色。

69～71は土師器甕。口縁部は「く」字状に外反し、胴部は球形をなす。**69**は口径19.8cm。胎土には若干量の細～中砂粒を含み、浅黄橙色～浅緑灰色。**70**は口径18.2cm。内面には粘土の継目痕が明瞭に残り、指頭押圧ナデ調整。胎土には多くの砂粒と雲母、赤褐色粒含み、淡黄橙色。**71**は口径17cm。口縁部はヨコナデ、内面は押圧後にケズリ状の粗いナデ。胎土は良質で、細～小砂粒と雲母を含む。

72・73は土師器高坏で、脚部は薄くラッパ状に外反する。**72**底径11cm。胎土は精良で、明橙色。**73**は底径10.9cm。胎土は良質。

243～246は石包丁。**243**は安山岩質の未製品。背部はストレートで刃部は半月形をなす。刃部と背部は逆向から剥離加工して作り出している。厚さは4mm。**244**は長方形状の石包丁で、体部の中央には内孔径5～7mmの鉈孔を穿っている。刃面は両面から研ぎ出し鎌はあるまい。幅は4.7cm、厚さは4mm。**245・246**は半月形の右包丁である。**245**は刃縁を両面から研ぎ出す。背部はストレートで背厚は2mmと薄い。**246**の刃縁はシャープで、鎌はよく通る。

253は石鎌の未製品。刃部は内弯刃で、両面から剥離に作り出す。体部の研ぎは粗く幅は5.3cm。

255～257は大型蛤刃石斧である。**255**は基端と刃部を欠き、断面形は円形をなす。幅は5.9cm、厚さは4.1cmを測る。**256**は玄武岩質。幅は7.7cm、厚さは4cmを測り、断面形は橢円形を呈する。**257**は粗研ぎ段階の基端部近くの未製品である。幅は6.6cm、厚さは4.1～5cmである。玄武岩質。

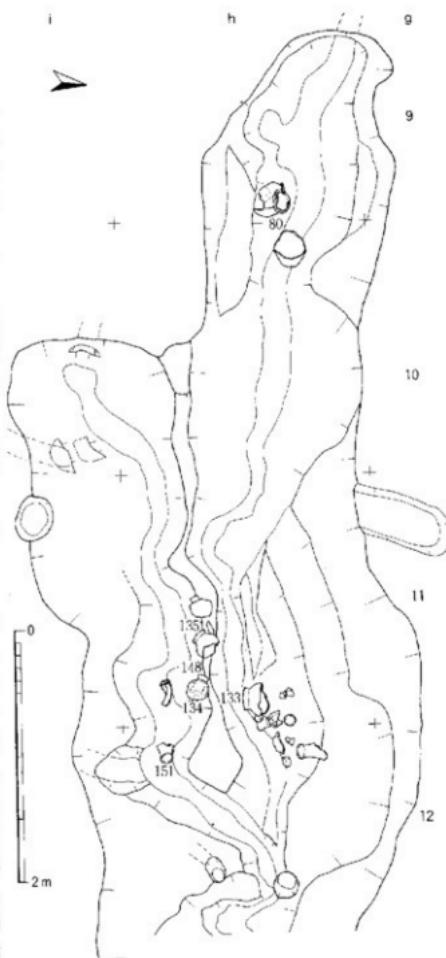


Fig.16. 谷頭下層遺物出土状況実測図 (1/40)

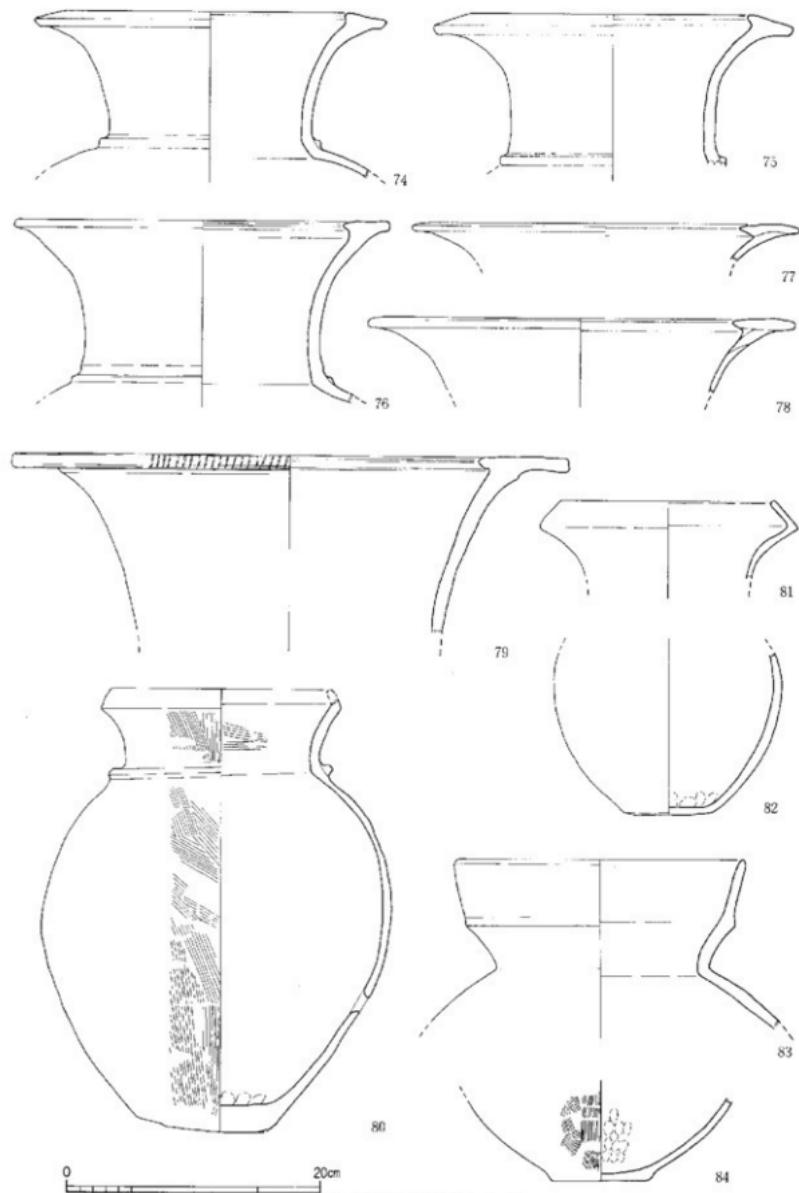


Fig.17. 谷下層出土土器実測図1 (1/4)

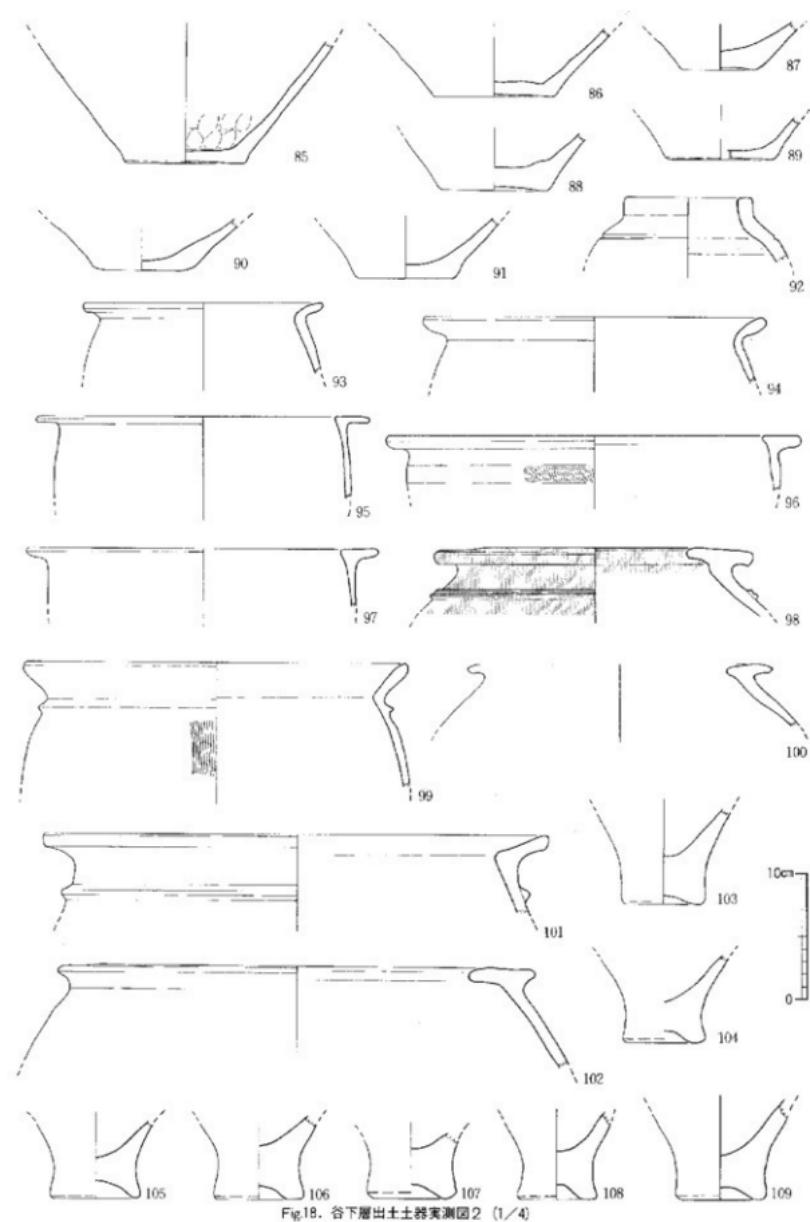


Fig.18. 谷下層出土土器実測図2 (1/4)

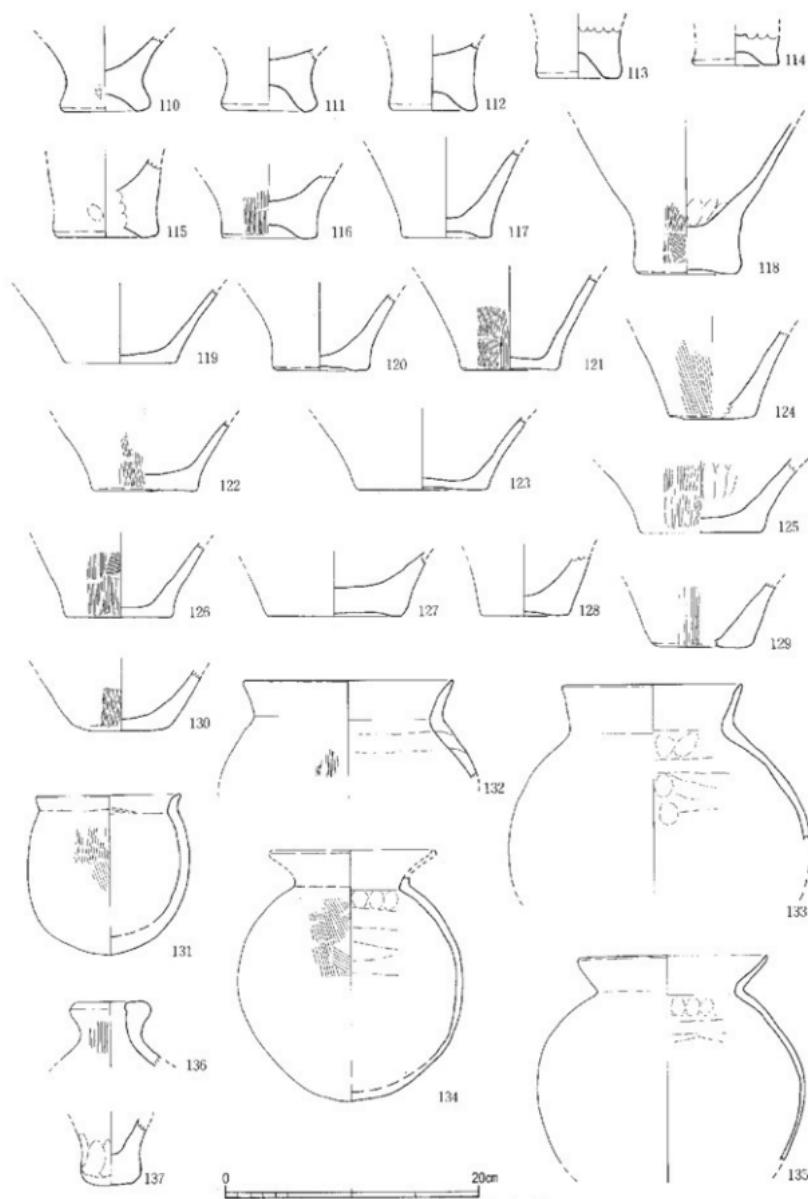


Fig.19. 谷下層出土土器実測図 3 (1/4)

260は柱状片刃石斧の未製品である。縱長材を打ち欠いて後主面、側面と刃面を粗く成形している。幅は4cm、厚さは4.1cmを測り、断面形は五角形をなす。

264～266は磨製石剣である。264は剣先部の半欠品。刃部はシャープに研ぎ出しが鎬は弱い。断面形は薄い菱形をなす。厚さは5mm。265は剣先近くの半欠品である。刃部は鋭く研ぎ出しが鎬はあまく、断面形は凸レンズ状をなす。刃部幅は3.3cm、厚さは8mmを測る。266は有茎式石剣の基部である。刃部は外弯気味にシャープに研ぎ出し、鎬は明瞭で断面形は菱形を呈する。幅は3.7cm、厚さは8mm。抉り込んで作り出した茎には内孔径4.5mmの円孔を両面から穿っている。茎の長さは2.4cm、幅は1.8cm、厚さは7mmで断面形は長方形をなす。

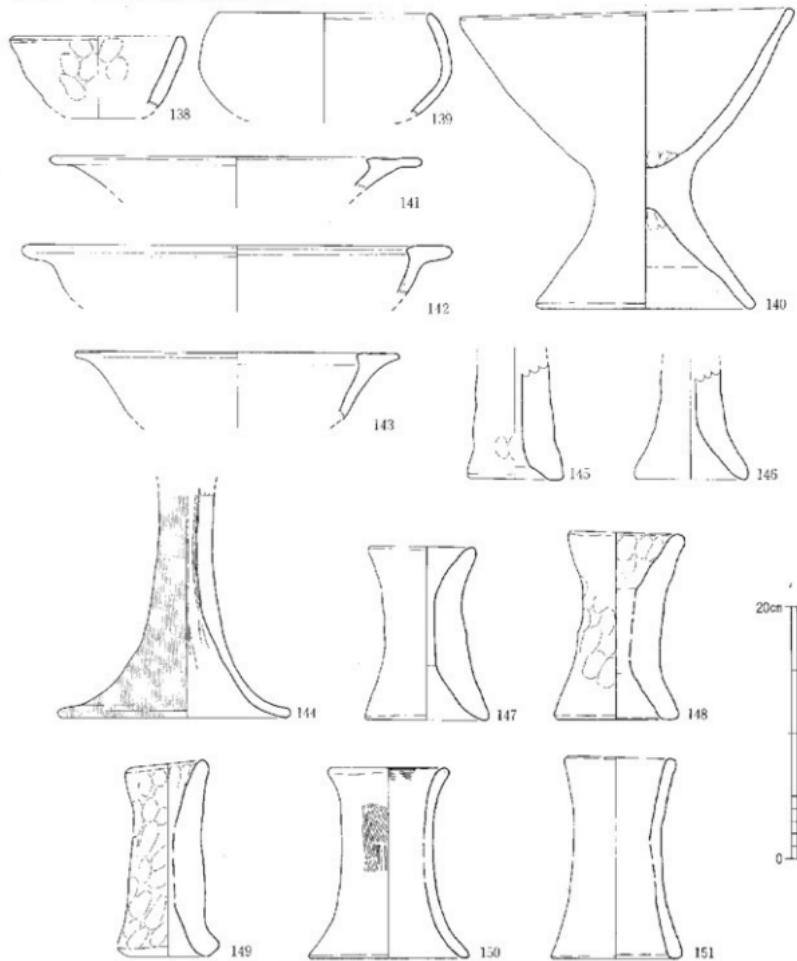


Fig.20. 谷下層出土土器実測図4 (1/4)

274～276は砾石。274は底面の中央が凹レンズ状に凹む。幅3.4～4.3cm、厚さは3.7cmで断面形は台形をなす。

砂岩質。275は六角形の断面形をなし、幅は3.7～4.8cm、厚さは3.2～4.1cmを測る。砂岩質。276は花崗岩。幅6.9cm、厚さは0.7～3.1cmと偏平で上面を砥面とする。

284は十製の紡錘車である。直径は4.4cm、厚さは1.5cmあり、中央部に孔径6mmの円孔を焼成前に穿っている。胎土には多くの石英砂と雲母微細を含み、淡黄橙色。

286はラクビー・ボール状の投弾。厚さ2.1～2.3cmで、長さは3.6cmになろう。胎土は多くの砂粒と雲母を含む。

下層の出土遺物(Fig.17～19.20.27.28.30.31.PL.14*15*18)

74～92は壺である。74～79は鋤先状口縁の広口壺で、上唇が外傾するもの(74・75)と水平なもの(76～79)がある。74～76の頸部には1条の三角凸帯を貼り巡らし、79はヘラ描きの刻み目を口唇部に施文している。内面は押圧ナデ調整。胎土には細～中砂粒と雲母を含み、色調は明橙色～黄灰色。口径は、74が27.8cm、75が28.4cm、76が29.8cm、77が30.6cm、78が33.8cm、79が44.2cmである。

80は底径10.4cmの二重口縁壺で、口径17.4cm、器高は35cmに復原できよう。口縁部は短く外反した後に緩く屈曲して小さく内傾する。頸部は長胴形をなし、頸部には1条のコ字凸帯を貼り巡らしている。調整は外面が粗い縦ハケ目、内面は頸部が横ハケ目、胴部は押圧ナデ。頸部と胴部内面には黒色物が付着している。胎土は石英小～粗砂粒を多く含み、明赤橙色。81は口径が17cmの二重口縁壺。口縁部は鋭く内傾する。83は口径22.9cm。口縁部は緩やかに立ち上がって屈曲し、弱い段を作つて小さくストレートに外反する。胴部は球形をなす。胎土は良質で多くの微細～中砂粒と雲母を含む。淡明橙色。82は底径7cmの球形の胴部。外面はナデ、内面は押圧ナデ調整で炭化物様の黒色物が付着している。明赤褐色～淡黄褐色。84は底径が7.4cmで、肩部は球形をなす。外面は縦ハケ目、内面は押圧ナデ調整。胎土は細～中砂粒を多く含み、淡橙～灰橙色。85～91は底部。平底で胴部は倒卵形をなそう。内底面には指頭押圧痕が残り、胎土は砂粒と雲母微細を含む。底径は85が9.4cm、86が9.6cm、87が6cm、88が8.4cm、89が8.6cm、90が8cm、91が7.5cm。92は口径が10cmの小型壺。口縁部は短く直口し、上唇を水平に整えている。胴部は球形をなし、肩部には1条の横凹線が巡る。胎土は良質で、外面が橙色、内面は黒色。

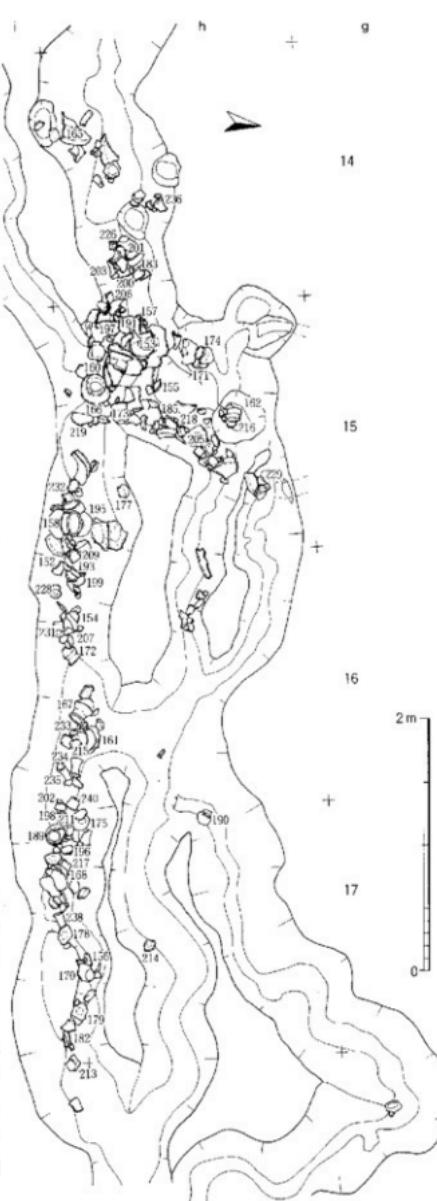


Fig.21. 谷最下層遺物出土状況実測図 (1/40)

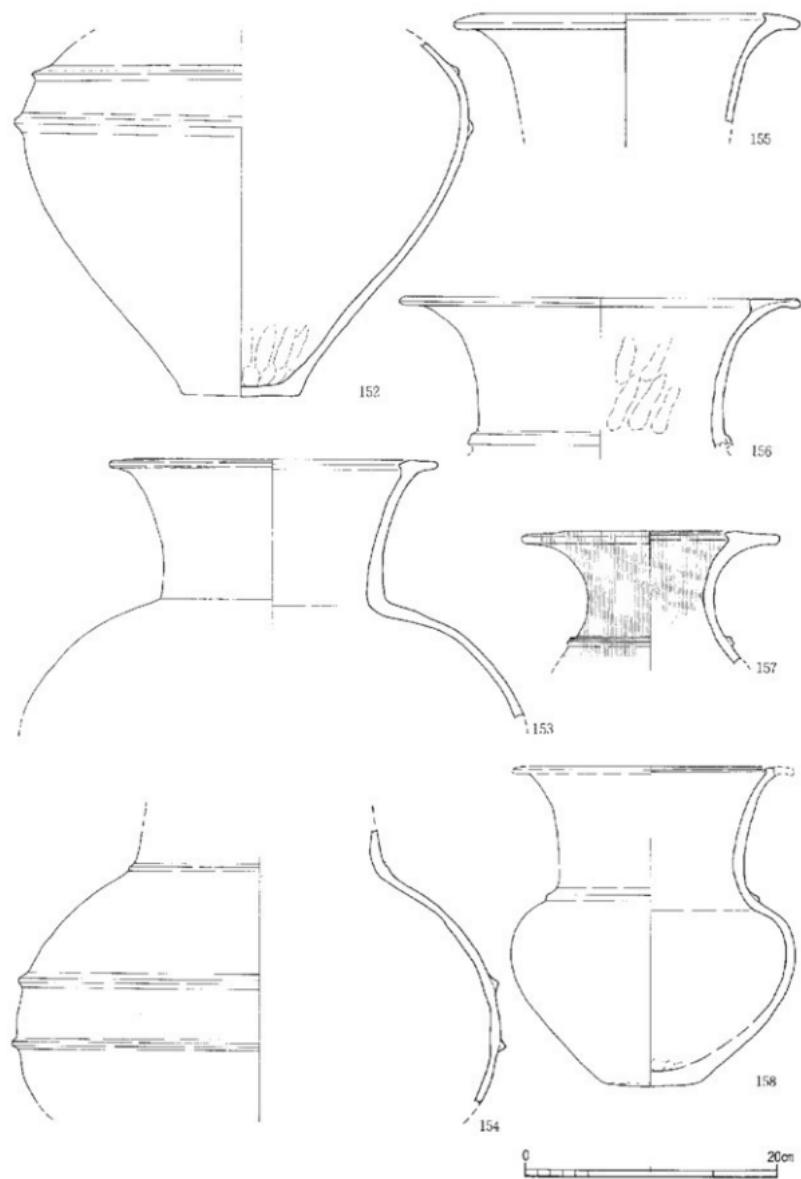


Fig.22. 谷最下層出土土器実測図 1 (1/4)

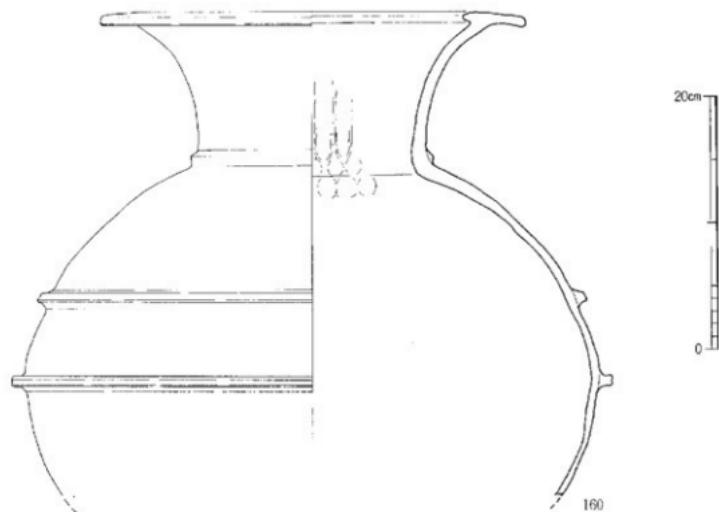
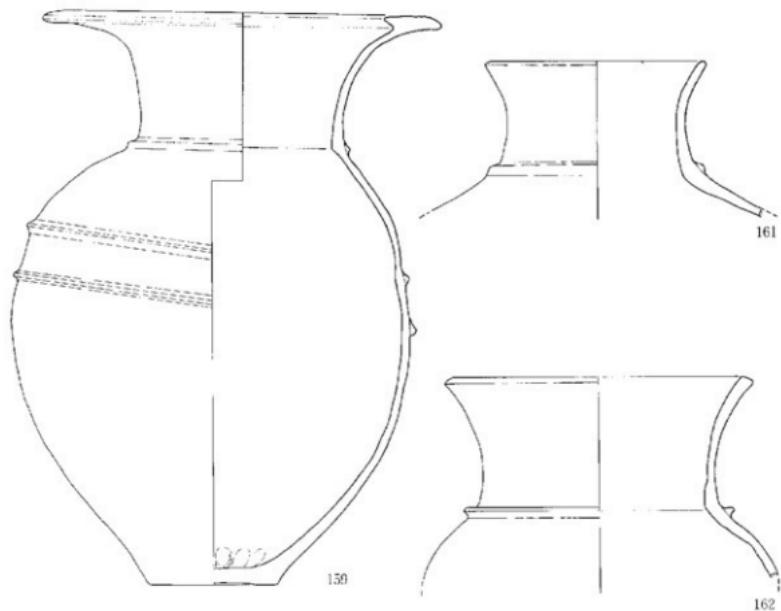


Fig.23. 谷最下層出土土器実測図2 (1/4)

93～131は弥生甕。93～97・101は逆L字口縁のもので、小さく外反するもの(93・94)と水平なもの(95～97)があり、胴部は卵形に窄まろう。口径は93が19cm、94が27.2cm、95が26.4cm、96が31.8cm、97が28cm。101は口径が39.8cmでストレートに外反する口縁部下には三角凸帯が巡る。99は口径が30.4cmで、「く」字状の口縁部下にはの三角凸帯が巡る。外面はハケ目、内面はナデ調整。色調は外面が浅白桜色、内面は浅黄桜色。98・100・102は内唇が強く張り出したT字状をなし、胴部は倒卵形になろう。98は口径が25.4cmで、口縁部下には1条のM字凸帯が巡る。上唇から外面は丹塗り磨研、内面はナデ。100は口径24.2cmで、内唇の張り出しあはや弱い。102は口径37.6cm。口縁部には煤様の黒色物が付着している。橙～黄桜色。103～115は中期前葉の甕。底部は上げ底で細く縮まっている。底部が小さく聞くもの(103～111)と直口するもの(112～115)がある。底径は6.3～7.5cmで、115は9cmと若干大きい。底面は指頭押圧ナデ調整で、胎土には細～粗砂粒と雲母を含む。116～130は中期中葉の甕。やや古い上げ底気味のもの(116～118)と平底のもの(119～130)がある。調整は外面がハケ目、内面はナデで内底面には指頭押圧痕が残る。胎土は砂粒と雲母を含む。底径は6.8～8.4cmで、123が10.4cm、125が9.5cm、127が10.5cmとやや大きめである。131は口径11.4cm、器高12.7cmの小型甕。口縁部は小さく「く」字状に外反する。胴部は球形をなし、底部は丸底になる。胴部上半はハケ目、下半はナデ、内面は押圧ナデ。外面には黒色物が付着し、胎土には多くの石英砂と雲母を含む。淡黄桜色。

132～135は上師器甕。胴部は球形をなし、口縁部は「く」字状に外反するもの(132・133)と小さく膨らんで外反するもの(134・135)がある。132は口径が16.6cm。外面はハケ目後にナデ、内面は粗いナデで粘土の難目痕が残る。133は口径が14.2cm。口縁部はストレートに外反する。内面には粘土の難目痕があり、指頭押圧ナデ調整。外面は暗赤褐色、内面は淡黄灰褐色。134・135は布留甕。134は外面の上半がハケ目、下半はナデで煤が付着している。内面は上半がヘラケズリ、下半は押圧ナデ。135は口径14.5cmで、口縁端部は小さく摘み上げる。調整は外面がナデ、内面は押圧後にナデ。

136は摘み部径6.4cmの蓋。天井部には円孔を穿つ。外面はハケ目、内面はナデ調整。淡黄桜色。

137～140は鉢。137は手捏ね土器で底径4.6cm。底部は厚く、内外とも押圧ナデ。138は口径14cm。体部は厚くストレートに立ち上がる。内外とも押圧ナデ。胎土は良質で赤褐色粒を含み、黄褐～明赤橙色。139は口径16.6cm。体部は扁球形をなし、口縁部は小さく膨らんで内傾する。140は口径26.8cm、脚径17.5cm、器高23.8cmの台付き鉢。体部は小さく膨らんで立ち上がり、脚部はストレートに聞く。調整は外面がナデ、内面がナデ、内底面は押圧ナデ。胎土には多くの石英砂と赤褐色粒を含む。

141～144は鋤先状口縁の高坏。口縁部は鋤先状をなすが、体部は浅く扁平なもの(141)と半球形のもの(142・143)がある。口径は141が29.4cm、142は34cm、143は25.8cmで142・143は内唇の張り出しが弱い。黄橙～淡黄灰色。144は底径18.4cmの脚部である。脚部は細く縮まり、裾部は大きくラッパ状に聞く。外面は粗い丹塗り研磨、内面は絞り～押圧ナデ。胎土は精良で砂粒と赤褐色粒を含む。

145～151は器台。145は底径7.5cm。体部は厚い筒状をなす。146は底径8.8cm。体部は厚く裾部は短くラッパ状に聞く。147は口径8.3cm、底径9.7cm、器高は13.7cm。受け部と裾部は厚い筒状の体部から小さく外反する。148は口径9.3cm、底径9.9cm、器高14.9cm。受け部は緩やかに外反し、裾部は短くストレートにのびる。内外とも指頭押圧痕が残る。149は口径6.6cm、底径8.4cm、器高は15.5cm。受け部は筒状に緩く外反し、裾部は短くのびて端部を外方に小さく摘み出す。内外とも押圧ナデ。150は口径9.6cm、底径12.6cm、器高15.1cm。受け部、筒状の体部から小さく外反し、裾部は緩くラッパ状に聞く。外面と内唇はハケ目、内面は押圧ナデ。151は口径8.8cm、底径10.4cm、器高16.1cm。受け部と裾部は薄い筒状の体部から小さくストレートにのびる。いずれも胎土は細～中砂粒と雲母を含む。

247～250は石包丁である。247は未製品である。背部はストレートに刃部は半月形に両面から剥離

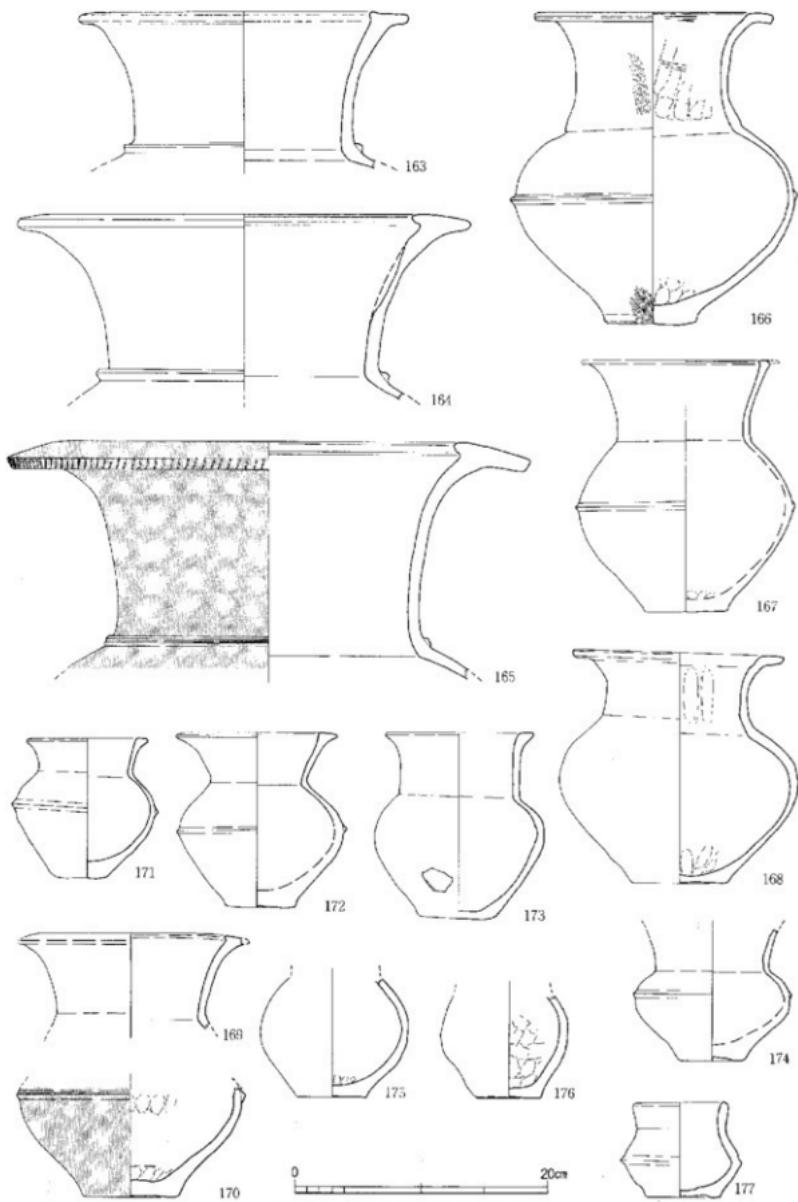


Fig.24. 谷最下層出土土器実測図3 (1/4)

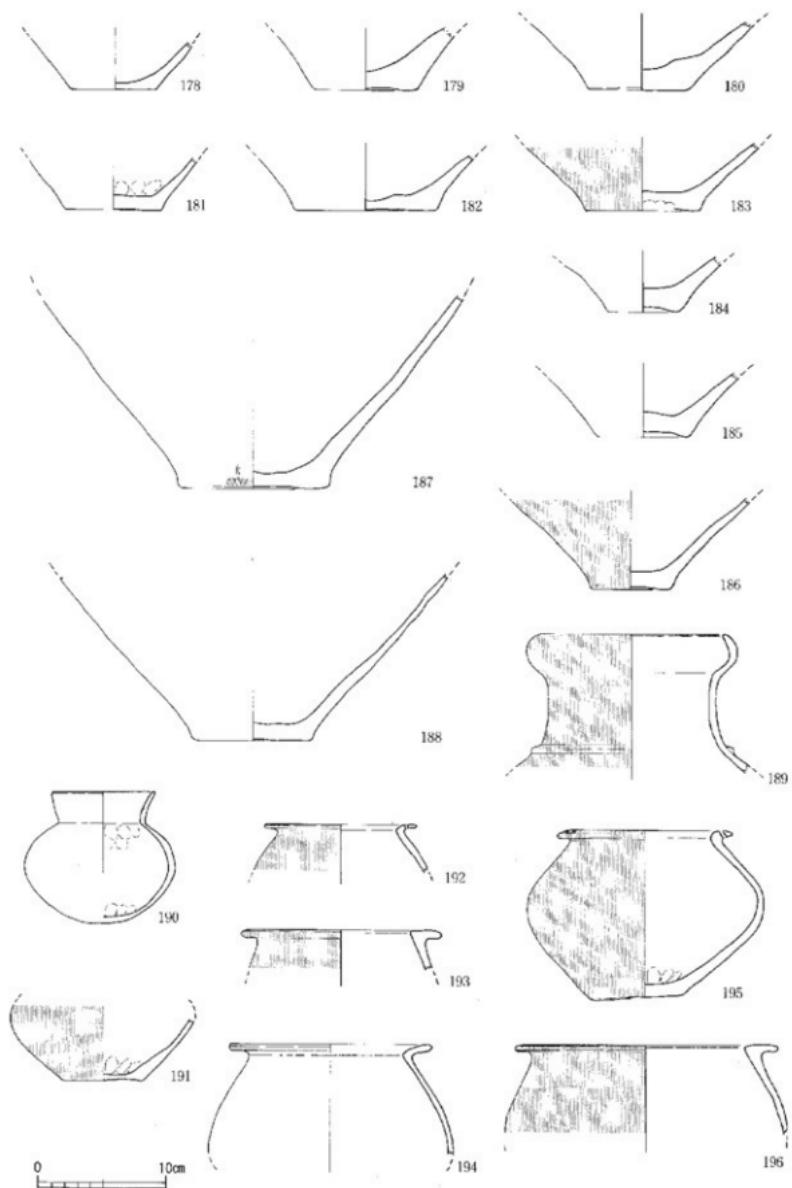


Fig.25. 谷最下層出土土器素描圖4 (1/4)

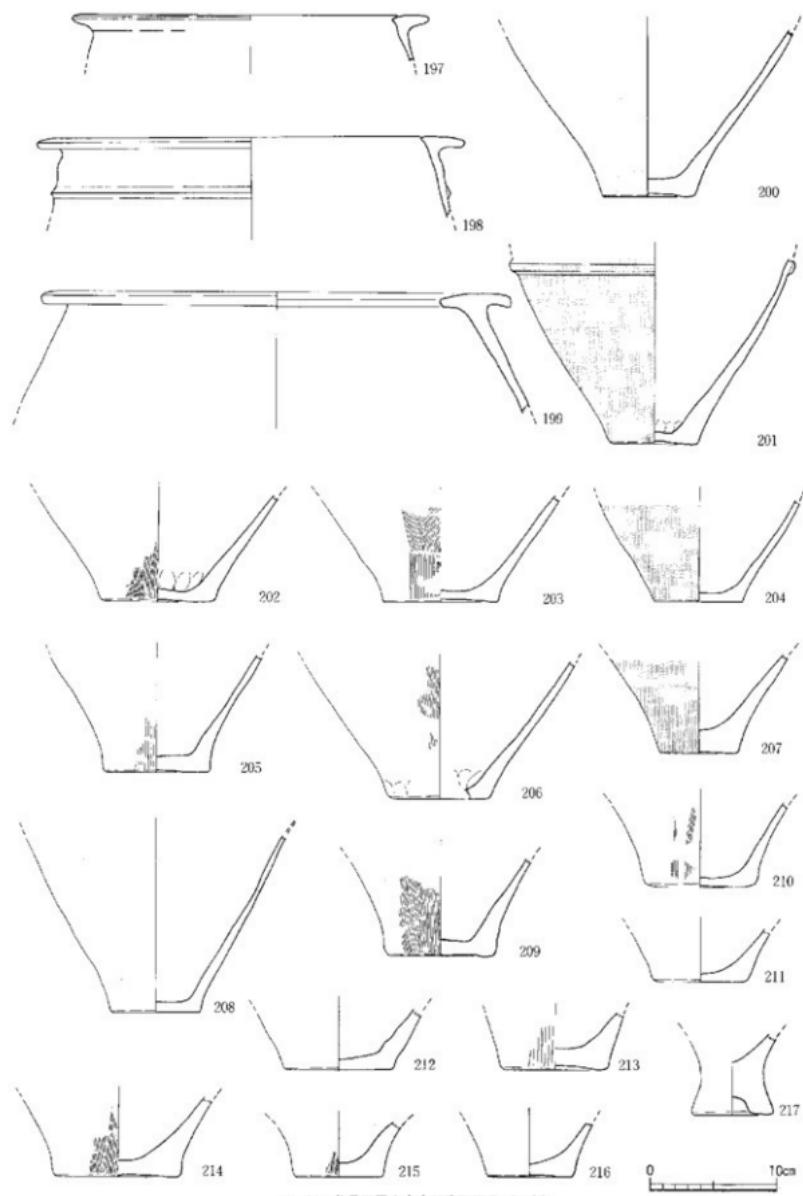


Fig.26. 谷最下層出土土器実測図5 (1/4)

0 10cm

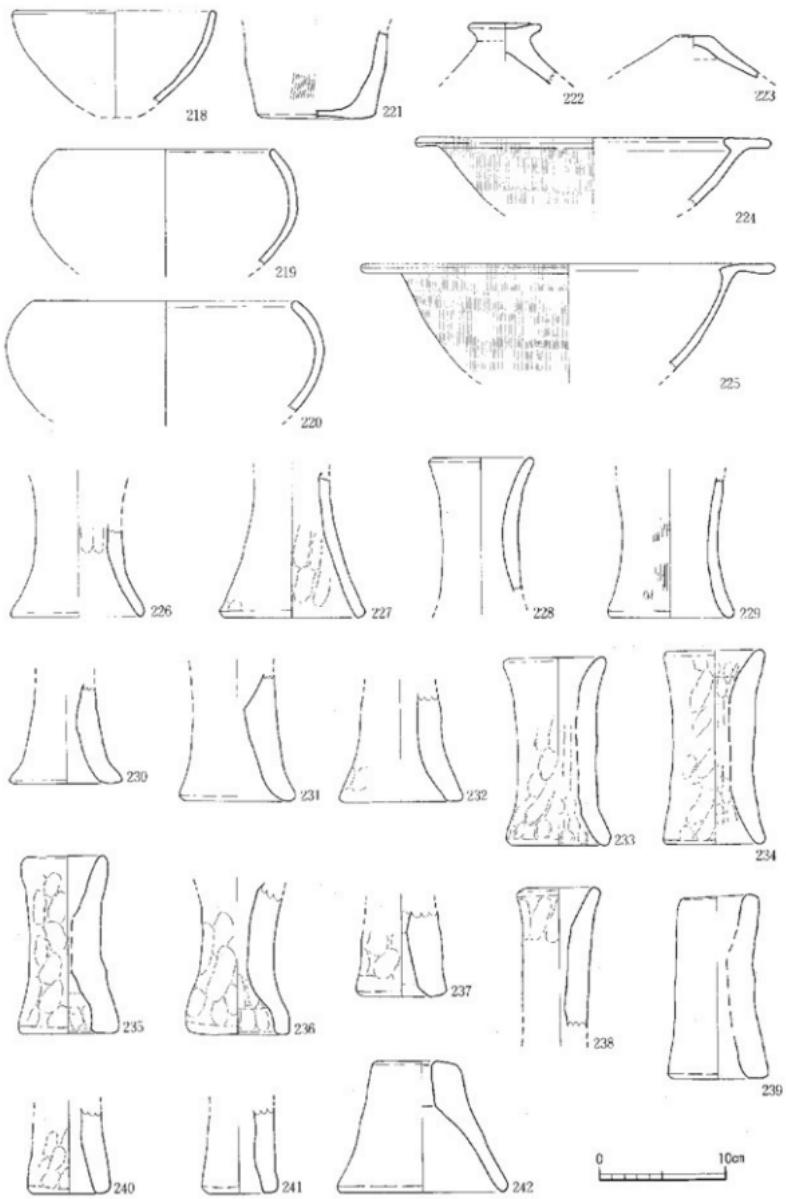


Fig.27. 谷最下層出土土器実測図 6 (1/4)

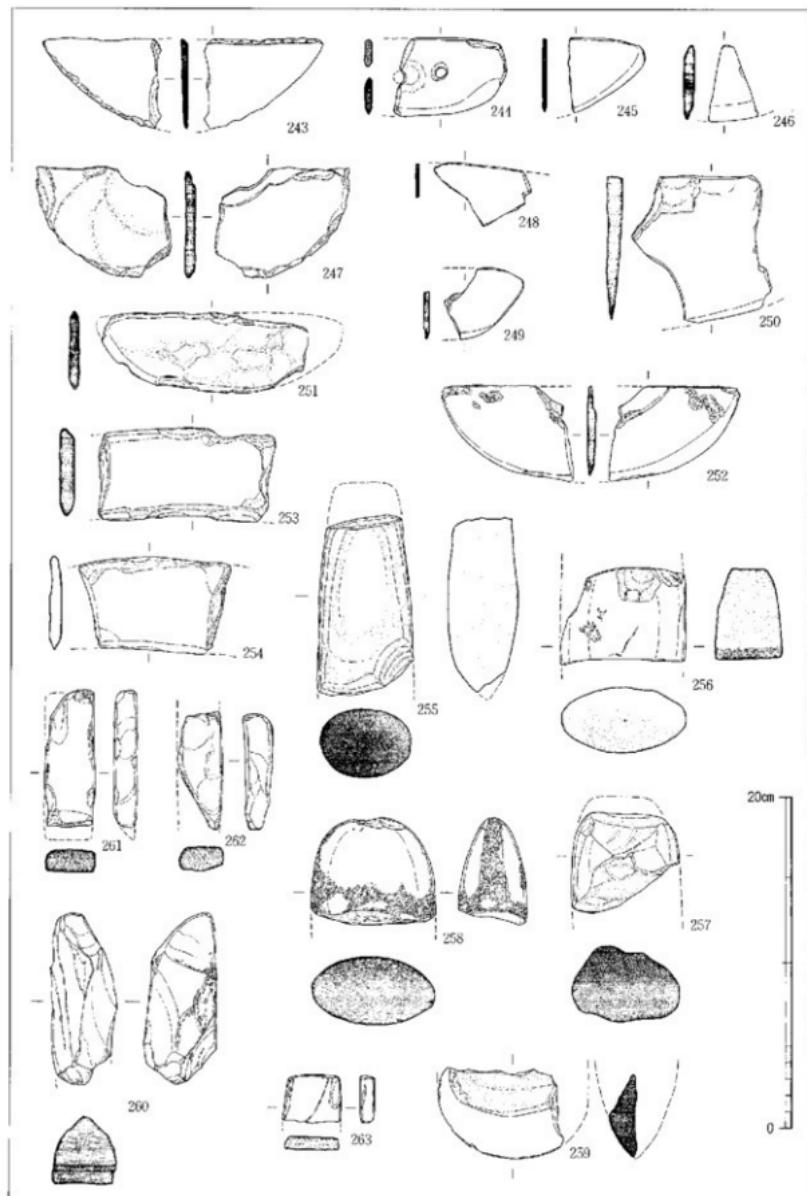


Fig.28. 谷出土石器実測図 1 (1/3)

して作り出している。厚さは4~6mm。**248**は背厚が2mmと薄く、体部の研ぎは粗い。半月形をなすか。**249**は厚さ4mmで、幅は4.4cmに復原できようか。刃部の研ぎ出しは弱い。**250**は半月形石包丁の大型品である。体部は1cmと厚く、刃部の研ぎ出しもシャープである。

258は大型蛤刃石斧の基端部で、側縁には結節痕がある。幅は7.5cm、厚さは4.1cmを測り、断面形は梢円形を呈する。玄武岩質。

261~263は層灰岩質の扁平片刃石斧である。**261**は刃縁を欠き、幅は3.1cm、厚さは1.4cm、長さは9cmに復原できよう。基部の側縁には紐の緊結痕が残る。断面形は長方形をなす。**262**は乳灰色、幅は12.7cm、厚さは1.7cmで断面形は長方形をなし、上面は凹レンズ状に窪む。**263**は基端部片。幅は3.5cm、厚さは9mmと薄く、断面形は長方形をなす。

267~270は磨製石剣である。**267**は刃部に鏽がつき、断面形は扁平な長六角形をなす。幅は3.1cm、厚さは6mm。**268**は剣先部である。上面の鏽は磨き出されて端部が緩くなる。幅は3.4cm、厚さは1.2cmを測り、断面形は菱形をなす。**269**は刃部が両面から鋭く研ぎ出されシャープな鏽がはいる。幅は3.3cm、厚さ9mmを測る。**270**は大型の石剣の剣先部で、幅は5.7cmを測る。刃部は鋭く研ぎ出し明瞭な鏽がはいる。刃面には堆積岩の縞目がはいり、断面形は菱形。

273は端部を欠く石戈である。刃部は両面から研ぎ出して鋭く、シャープな鏽がはいる。断面形は菱形。莖は小さく作り出し、孔は間に並行して2孔を穿っている。孔は内孔径4.5~5.5mmで両面

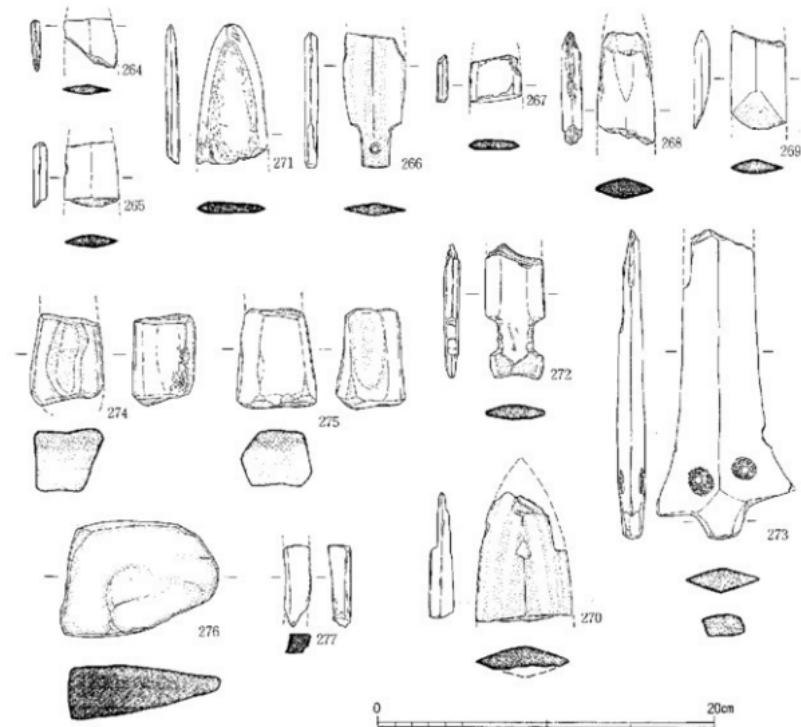


Fig.29. 各出土石器実測図2 (1/3)

から小さく敲打して穿孔している。

関は鑄に対して 15° の角度がある。

277は小型の砥石である。幅1.5cm、厚さは1.1~1.3cmで、手持ち型か。断面形は並行四辺形。

278~280は無茎凹基式の打製石鎌。

278は長さ2.8cm、幅は1.85cmを測る。

基部には茎状の小さな突起があり、先端から側邊には齧痕がある。**279**

は黒曜石製。長さは2.2cm、幅は1.4cmで、基部は長く基部の抉り込みは深い。**280**は安山岩。鐵身は三角形状をなし、基部は半月形に抉り込んでいる。長さ2.2cmは、幅は2.05cm。

278は安山岩質の横長剥片を両面加工したスクレイパーである。刃部は半月形をなし、両面からの剥離で作り出している。

283は土製の紡錘車である。直径は4.5~4.6cm、厚さは1.6cmあり、中央部には孔径3mmの円孔を焼成前に穿っている。胎土には細~小砂粒と雲母微細を含み、色調は乳灰色。

最下層の出土遺物 (Fig.22.23.24.25.26.27.28.29.30.31 PL.15~18)

152~189は弥生中期後半の壺。**152~165**は広口壺で、口縁部が鋤先状をなすもの(153・155~160・163~165)と朝顔状に外反するもの(161・162)がある。**152**は底径9.4cmで、玉葱状をなす胸部の最大径部と肩部にコ字凸帯を貼り巡す。内面は押圧ナデ。**153**は口径26cm。頸部は細く縮まり、胴部は球形をなす。**154**は頸部に細い三角凸帯を1条と球形の胴部に2条のコ字凸帯を貼り巡らす。**155**は口径27.6cm。鋤先状の口縁部は小さく外傾する。**156**は口径31.8cm。頸部には1条のコ字凸帯が巡り、内面は指頭押圧ナデ調整。胎土には赤褐色粒を含む。**157**は細頸壺で、なだらかに内傾する頸部には1条のM字凸帯が巡る。外面から頸部上部は丹塗りで、外面は暎文状の粗い研磨、内面はナデ。口径は20.4cm。**158**は底径7.8cm、器高27.4cm。口縁部は上唇がやや反り気味で、頸部には1条の三角凸帯が巡る。胴部は玉葱状の扁球形をなす。内面は押圧ナデ調整。**159**は口径31.5cm、底径10.8cm、器高は31.5cmで歪みが著しい。口縁部は内唇の張り出しが強く、短く外反する頸部には三角凸帯が巡る。長胴形の胴部中位にはだれた2条のコ字凸帯を貼り巡らしている。調整は外面から頸部内面がナデ、胴部内面は押圧ナデ。**160**は口径33.8cm。内唇の強く張り出した口縁部は小さく外傾し、頸部には三角凸帯が巡る。胴部は球形をなし、中位にはコ字凸帯を2条貼り巡らす。外面は丁寧なナデ、内面は押圧ナデ。**161~162**は口縁部が朝顔状に外反する広口壺。**161**は口径17.4cmで、頸部には三角凸帯を貼り巡らしている。白橙色。**162**は口径24.4cm。頸部には三角凸帯が巡り、胴部は扁球形をなす。外面はナデ、内面は押圧ナデ。外面に丹痕があり丹塗り土器の可能性がある。

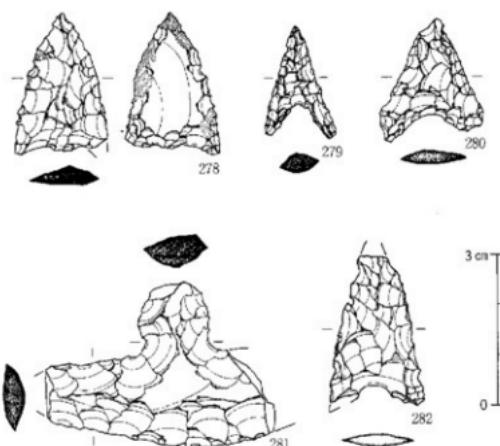


Fig.30. 谷出土石器実測図3 (1/3)

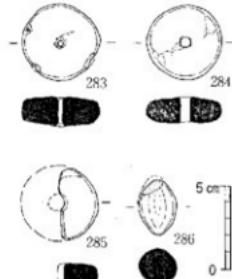


Fig.31. 谷出土土製品実測図 (1/3)

る。**163**は口径26.6cmを測り、頸部には1条のコ字凸帯を貼り巡らしている。頸部はナデ、胸部内面は押圧ナデ。雲母と赤褐色粒を含み、明橙色。**164**は口径35.8cm。厚い口縁部は僅かに外傾し、内唇は張り出しが強い。頸部にはコ字凸帯が巡る。口縁部と凸帯に模様の黒色顔料が付着しており、全面に塗布されていた可能性もある。**165**は口径44cmの丹塗り壺。外傾する口縁端部にはヘラ描きの刻み目を施文し、頸部にはM字状の凸帯を貼り巡らす。内面は押圧ナデ。**166**～**170**は中型の広口壺である。**166**は口径18.9cm、底径7.3cm、器高は24.7cm。口縁部は屈曲して僅かに外傾し、玉葱状をなす肩部は最大径部にコ字凸帯を貼り巡らしている。外面はハケ目後に研磨状の丁寧なナデ、内面は押圧ナデ調整。淡黄橙色。**167**は底径6.6cm、器高20cmで鉢先状の口縁部は内唇が小さく張り出す。底部は厚く、球形の胴部には小さな三角凸帯を貼り巡らしている。内面は押圧ナデ。胎土には雲母と赤褐色粒を含み、淡橙～淡明赤褐色。**168**は口径16.7cm、底径7.6cm、器高18.4cm。水平に外反する口縁部は内唇側に緩い段を作る。底部は薄く、胴部は玉葱状の扁球形。外面は丁寧なナデ、外面は押圧ナデ。**169**は口径18.2cm。**170**は底径7.6cmで、扁球形の胴部にはM字状の連続する三角凸帯が巡る。下半部には丹塗り痕があり、全面に塗布されていたと推定される。内面は押圧ナデ調整。**171**～**177**は小型の広口壺。**171**は口径9.6cm、底径4cm、器高11.1cm。頸部は短く外反し、口縁部は小さく水平に摘み出す。扁球形の胴部にはシャープな三角凸帯が巡る。**172**は口径12.8cm、底径5.6cm、器高13.9cm。口縁部は小さく外傾し、内唇が僅かに張る。底部は厚く、扁球形の胴部にはシャープな三角凸帯が巡る。胎土は雲母と赤褐色粒を含み、明赤褐色。**173**は口径11.7cm、底径5.4cm、器高14.8cm。口縁部は直口して立ち上がる頸部から小さく水平に摘み出す。扁球形の胴部下半には穿孔がある。**174**は底径5cm。底部は厚く、扁球形の胴部にはシャープな三角凸帯が巡る。内面は押圧ナデ。**175**は底径5.4cmを測り、胴部は球形をなす。外面は丁寧なナデ、内面は指頭押圧ナデ。砂粒と雲母を多く含む。**176**は底径5.6cm。球形の胴部は外面が丁寧なナデ、内面は指頭押圧ナデ。**177**は口径7.5cm、底径5.8cm、器高7.5cmを測る小型の直口壺。口縁部は短く直口し、算盤玉状の胴部には摘み出しによる三角凸帯が巡る。胎土には中砂粒を多く含み、白褐色。**178**～**186**は壺の底部。底径が6.6～9cmの小さいもの(178～186)とやや大きめのもの(187～188)がある。このうち**183**・**184**・**186**は丹塗り土器である。**185**の内底面には炭化物様の黒色物が僅かに付着している。いずれも内面は押圧ナデ調整で、胎土には砂粒を含み、明橙～赤褐色。**189**は口径14.6cmの袋状口縁壺である。短い頸部には1条の三角凸帯が巡る。外面は丹で彩色されている。胎土には細～粗砂粒を多く含み、内面は白褐色。

190は口径8.1cm、器高10.4cmの小型丸底壺である。口縁部は短く外反し、胴部はやや肩の張った球形をなす。内面は押圧ナデ調整。胎土は良質で、淡黄橙色。

191～**196**は無頸壺。**191**は底径が6.4cm、外面は丹塗り研磨で内面は押圧ナデ調整で明赤橙色。**192**は口径12cm。口縁部は短く水平に折り曲げて円孔を穿つ。外面は丹塗り研磨。内面は淡明橙色。胎土には石英砂を多く含む。**193**は口径15.8cm。逆L字状の口縁部は厚く水平に外反する。外面は丹塗り、内面はナデ。**194**は口径16cm。口縁部は逆L字状に外反し、胴部はやや下膨れの算盤玉状をなす。外面には二次焼成による赤変がある。**195**は口径13.8cm、底径7.4cm、器高13.4cm。口縁部は短い逆L字状をなし、上層には2孔1対の円孔を穿っている。胴部は算盤玉状をなす。口縁部と胴部には丹痕があり、丹塗り土器であろう。内底面は指頭押圧痕が残り、淡橙～明赤橙色。**196**は20.8cmで、口縁部は水平な逆L字状をなす。上唇から外面は丹塗り研磨、内面は押圧ナデ。胎土は微細砂と雲母微細を含み、明赤橙色。

197～**217**は弥生中期の甕。**197**は口径28.4cm。逆L字状の口縁部は内唇が小さく張り出し、胴部は倒卵形をなそう。胎土には多くの細～小砂粒と雲母を含む。**198**は口径33.8cm。逆L字状の口縁部は

僅かに外傾し、内唇を小さく摘み出す。口縁部下にはシャープな三角凸帯をが巡る。胎土は細～小砂粒と雲母を含む。199は口径37.2cm。口縁部は厚いT字状を呈し、胴部は倒卵形をなす。胎土は多くの石英砂と雲母を含み、明黄橙色。200～216は底部で、胴部はストレートに窄まる。200・201・204・207は丹塗りの甕。201は胴部中位に扁平なコ字凸帯を貼り巡らす。208・210・213・214の内底面には炭化物様の黒色物が付着している。調整は外面がハケ目、内面は押圧ナデ。底径は6.2～8.2cmで、212は8.8cm、202は9cm、214は9.8cmとやや大きめである。217は中期前葉の甕で底径は6.4cm。厚い底部は上げ底状をなし、細く窄まって胴部へと続く。外面はナデ、内面は押圧ナデで内底面には炭化物様の付着物が隙間に遺存する。胎土は粗く石英小～中砂粒と雲母を含む。外面は赤橙色、内面は褐色。

218～221は鉢。218は口径16cm。体部は半球形に窄まり、口縁部は小さく直口する。外面はナデ、内面は指頭による押圧ナデ。胎土には多くの石英砂と雲母を含む。219は口径17.4cm。口縁部は半球形の体部から小さく膨らんで内弯し、端部を丸く納める。口縁部はヨコナデ、内面はナデ調整。胎土には細～粗砂粒を含む。220は口径20.8cm。体部はやや扁平な半球形をなし、口縁部は小さく膨らんで内弯する。内面は押圧ナデ。胎土には細砂粒を多く含む。221は底径9.4cm。体部は厚く筒状に立ち上がる。外面は粗い縦ハケ目、内面はナデ。

222・223は蓋である。222は甕の蓋で、摘み部径が5.9cmを測る。摘み部は外方に大きく抜き出し、体部は陣笠状に大きく開こう。胎土良質で、細～小砂粒と雲母を含む。223は天井部径が3cmを測る無頸蓋の蓋。天井部は小さく、体部は緩やかにのびる。内面はナデ、天井部は強い指頭押圧ナデ。

224・225は丹塗りの高杯である。224は口径28.3cm。錐先状の口縁部は上縁を水平に整え、内唇が張り出す。体部は扁平な半球形をなす。剥落か著しい内面も丹が彩色されていたものであろう。胎土は良質で細砂と雲母微細を含み、色調は淡黄橙色。225は口径33cm。逆L字状の口縁部は内唇を小さく抜き出し、体部は半球形をなす。胎土は良質で石英砂、雲母微細と赤褐色粒を少量含む。

226～242は器台で、脚部がラッパ状は開くもの(226～232)と筒状をなすもの(133～241)に大別され、前者は更に器肉が薄く裾部が伸びやかに開くもの(226～229)と器肉が厚く小さく開くもの(230～232)に細分される。226は底径10.5cm。227は底径11.6cm。脚部はラッパ状に外反する。外面はナデ、内面は指頭押圧ナデ。228は口径8.3cm。受け部は筒状の体部から緩やかに外反する。胎土には雲母と赤褐色粒を含む。224は底径1

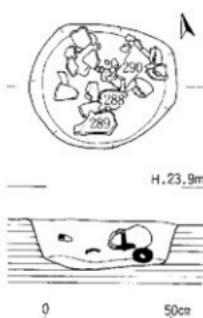


Fig. 32. 17号ビット実測図 (1/20)

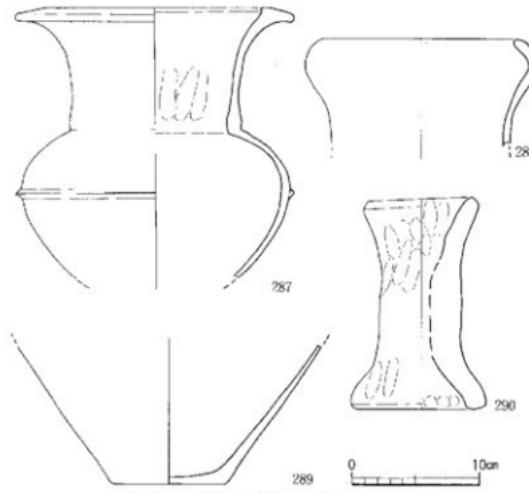


Fig. 33. 3・17号ビット出土土器実測図 (1/4)

0cm。脚部は筒状の体部から小さく開く。外面はハケ目、内面はナデ。230は底径8.8cm。厚い体部は細く縮まり、脚部は小さく外反して端部を外方に摘み出す。調整は押圧ナデで内面には絞り痕がある。231は底径9.2cm。脚部は厚い体部から小さく外反する。調整はナデ～押圧ナデ。232は底径9.8cm。内面はナデで明赤褐色。233は口徑8.2cm、底径8.3cm、器高は14.9cm。受け部と脚部は筒状の体部から小さく外反する。内外面とも強い指頭押圧ナデ。234は口径7.8cm、底径7.8cm、器高は15.4cm。体部は厚い筒状をなし、受け部と脚部は小さく外反する。内外とも押圧ナデ。235は口径6cm、底径7.9cm、器高は14.1cm。受け部は小さくストレートに立ち赤競り、脚部は内側に屈曲して直立する。内外面とも指頭押圧ナデ。

236は底径8.4cm。厚い体部から小さく外反する脚部は大きく屈曲して直立する。調整は押圧ナデ。237は底径7.3cm。脚部は筒状の厚い体部から小さくストレートにのびる。調整は指頭押圧ナデ。238は口径6.6cm。体部は細い筒状をなし、受け部は小さく外反する。内外とも押圧ナデ調整。明赤褐色。239は口径6.2cm、底径8cm、器高は14.5cm。体部は厚く筒状をなし、受け部は小さくストレートに外反する。受け部内面には弱い段を造る。240は底径6.4cm。241は底径6cm。いずれも胎土は粗く、小～中砂粒と雲母を含む。242は口径6.5cm、底径13.6cm、器高は10.4cm。厚い天井部には円孔を穿ち、脚部は短くストレートにのびる。内面は押圧ナデ。胎土は石英砂と雲母微細を含み、淡黄橙色。

251・252は右包丁。251は未製品。背部はストレートで、刃部は緩やかな外刃し、刃面は両面から研ぎ出している。幅は5.8cm、長さは15cmに復原できよう。252は半月形のもので、刃部の研ぎ出しあはシヤーブで鏡は明瞭である。背部はストレートで厚さは5mm。体部上縁には紐孔がある。

254は背部が緩く外弯する石鎚で、刃部は直線刃状をなし両面から研ぎ出す。背厚5mm、幅は5.5cm。

259は大型蛤刃石斧の刃部片。刃面は丁寧に研ぎ出している。玄武岩質。

271・272は舟型石剣の剣先である。剣身は扁平で、刃部は両面から鋭く研ぎ出し明瞭な鍋がはいる。幅は4.2cm、厚さは7mm。272は有柄式の磨製石剣である。剣身は扁平で、刃部は両面から研ぎ出す。柄部は両側縁から抉り込んで作り、握部には2ヶ所に凸がはいり明らかに銅剣を模したものである。

281は無茎凹基式の打製石鏃で、黒曜石製。二等辺三角形を呈し、断面形は薄い凸レンズ状をなす。

285は土製紡錘車の半裁品である。厚さは1.1cmで、直径は4.5cmに復原できようか。中央部には焼成前に円孔を穿つ。胎土には石英小砂粒を多く含み、色調は乳白色。

4). ピット

本調査区では多くのピットを検出した。これらの中には明瞭な柱痕跡が確認された柱穴もあったが、掘立柱建物跡としてはまとまらなかった。

3号ピット SP-03 (Fig.5)

調査区の北西部にあり、3号流水路(SX-03)上に掘り込まれている。平面形は直径が25～30cmの円形で、深さは15cmを測る。覆土は黒茶褐色土。

出土遺物 (Fig.33)

287は口径が22cmの壺。頸部はラッパ状に緩やかに立ち上がり、鋤先城

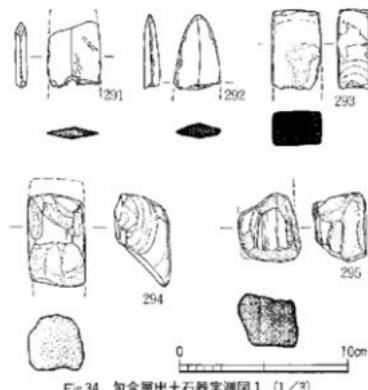


Fig.34. 包含層出土石器実測図1 (1/3)

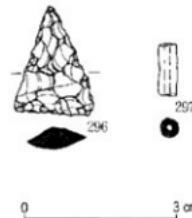


Fig.35. 包含層出土石器・管玉実測図2 (1/1)

の口縁部は小さく外傾する。胸部は扁球形をなし、最大径部にシャープな三角凸帯が巡る。淡黄橙色。

17号ピット SP-17 (Fig.32)

調査区の中央の谷上縁に立地し、6号焼土壌(SK-06)の西方3mの距離にある。平面形は50×60cmのやや梢円形をなし、深さは20cmを測る。断面形は逆台形を呈する。覆土は淡黒色上で、壇底からは弥生中期の壺(288)や甕(289)、器台(290)が出土している。

出土遺物 (Fig.33. PL.18)

177は袋状口縁の長頸壺で、口径は15.2cm。口縁部は直口する頸部から小さく外反し、屈曲して緩やかに内弯する。内唇はヨコナデ、頸部は縱方向の指頭押圧ナデ。289は底径8.8cmの甕。胸部は倒卵形に立ち上がり、外底面には二次焼成痕が残る。胎土には砂粒を含む。290は口径9.1cm、底径10.6cm、器高16.8cmの器台。器肉は厚く、口縁部は筒状の体部からストレートに外反する。脚部は小さく開き、端部を折り曲げて直口させている。内外面とも押圧ナデ。胎土は粗く石英砂と雲母微細を含む。

5). 包含層出土の遺物 (Fig.34.35. PL.17・18)

本調査区では、谷頭上縁の狭小な範囲に暗灰黒色～暗茶褐色が5～20cmの厚さで堆積しており、その埋土上には6号土壌(SK-06)をはじめとするピットが掘り込まれていた。地山上のこの埋土中に土器片等の遺物が含まれており、この層を遺物包含層として取り扱った。

出土遺物 (Fig.34.35. PL.17・18)

291・292は磨製石剣。291は刃部幅3.1cm、厚さは6mm。鏃は鋭く、基部には円孔を穿っている。菱形の断面形。292は剣先。鏃はやや鋭さを欠き、断面形はやや崩れた菱形をなす。厚さは9mm。安山岩質。

293・294は片刃石斧。293は幅2.9cm、厚さは2cmで小型方柱状片刃石斧にならうか。断面形は長方形をなす。294は幅3.4cm、厚さ3.3cmの柱状片刃石斧で、断面形は方形をなす。層灰岩質。

295は砥石である。上面と右側縁には溝状の細い凹みがある。砂岩質。

296は黒曜石製の無茎式三角鎌。長さ2.1cm、基部幅は1.65cmで、断面形は菱形に近い形状をなす。

297は碧玉製管玉である。長さは1cm、直径は4mmを測り中央部には径1mm円孔を穿っている。

IV. おわりに

油山北麓にのびる低丘陵上には、宝台遺跡や丸尾台遺跡など弥生時代の遺跡が多く拡がっている。桶井川上流の左岸に連なる低丘陵上に立地する長尾遺跡もそのひとつで、開析谷を隔てた南方には弥生時代中期の集落跡と甕棺墓が小支丘ごとに立地する宝台遺跡がある。またその丘陵尾根を挟んだ西側の緩斜面上には内行花文鏡や素環頭鉄刀を甕棺墓に陪葬する丸尾台遺跡が対峙してあり、長尾丘陵は桶井川流域の核的地域として位置づけられる。

長尾遺跡の第1次調査では、7基の土壌とピットのほかに不整形土壌を検出した。これらの遺構の多くは東側に弯入する谷の西側上縁部と北側の緩斜面上に占地しているが、その分布は4号土壌(SK-04)を西限、1号土壌(SK-01)を北限とするごく限られた範囲にとどまり、これを除く丘陵面は完全に削平されて消失している。それ故に長尾遺跡のIH状は容易には復原しえないが現況から復原すると、調査地は横内から野添へとのびる長尾丘陵の東側の斜面にあたる。その東側には桶井川の開析によって形成された小さな谷が北東方に開口し、西折して弯入している。この谷の西側には開削された段丘が切り立ってあることから谷奥の西縁は4号土壌(SK-04)迄はなだらかな面を作り、これを壇として急峻な傾斜面を形成していたものと推察される。南側は南東方向に拡がる谷の北縁と東縁に面した斜面が丘陵の尾根から続いていたものと推定される。これに対して北側には比較的なだらかな緩斜面のがびていたものと察せられる。谷中からは甕や甕、高环等の日常雑器とともに大型甕の破片も出土しており、この面上に甕棺墓地を含む集落があったものと推察される。また、その出土量からすると宝台遺跡的な小単位の集落が想定され、丸尾台遺跡のような大規模なもののは考えがたい。

一方、検出された土壤のなかでその機能の明らかなものは焼土壙である6号土壙(SK-06)があるだけで、遺跡の全体像は明らかにはしがたい。このなかで不整形土壙(SX)としたものはいずれも尾根筋から谷筋へ、あるいは緩斜面から谷底へトンネル状の通路的空間をもって谷底へと繋がっている。このトンネル状の空間は幅が20~30cm、高さが30~60cmほどのもので、うねる様に蛇行しながら谷奥の開口部へと続いておりとても人を通すようなスペースは考えがたい。このような状況を勘案すれば、このトンネル状の通路的空間は自然発生的な流水路であり、不整形土壙はその流入口としての機能を単純に愚考した。仮にこの上縁に溜井的な灌漑施設を想定するとすれば、その堰堤から谷への通水を考えねばならず、その通水路としては簡便な暗渠的なものが要求されよう。このことからすれば、長尾遺跡の通路的空間の上層には人為的な埋土は観察されず、且つ構造的にも不都合があり、否定的にならざるをえない。今ひとつ、谷口に堰堤を想定してこの小さな谷全体を灌漑の施設として考えると、谷底へドロ状の沈殿物が観察されず、谷底から出土した遺物に貯留による散乱も観られないことからするとこれも否定的にならざるをえない。

また、谷奥の流水路から続く谷底に流れる溝の上面からは壺や器台、高杯などの土器や石器類が列状に拡がって出土した。状況からしてこれは谷上縁からの単なる流入ではなく、何らかの人為的な投棄を想起させる。これをして短絡的に祭祀とは断じがたいが、谷に湧き出す自然の恵みに対して行なわれた何らかの祭祀的行為に帰結して考えたい。しかしながら、それが何であったかは即断し得ず、且つそのような事例に乏しいことから類例の増加を待って改めて検討したい。

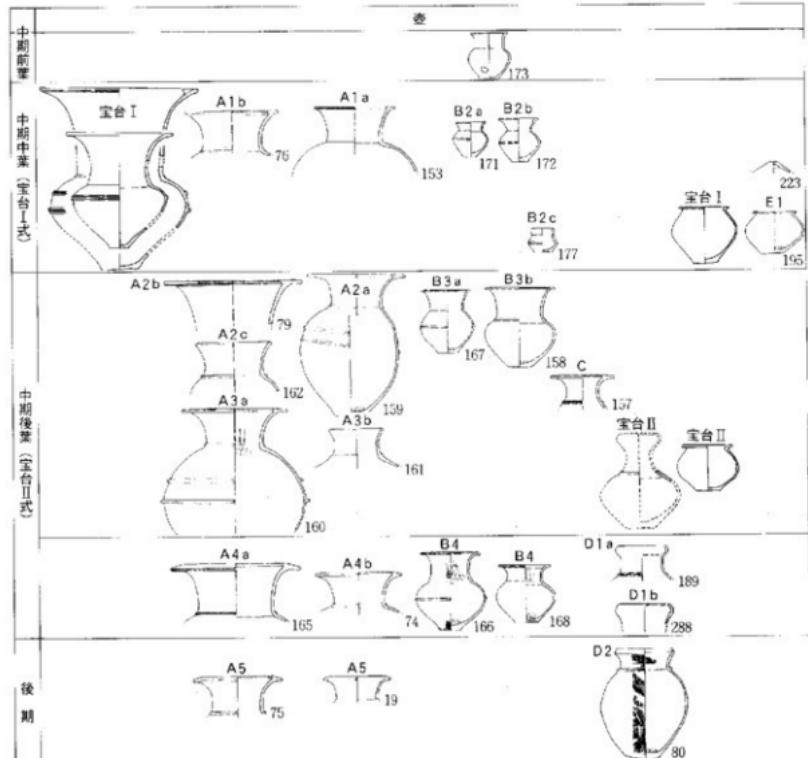


Fig. 36. 長尾遺跡弥生土器編年私窯図 1 (1/16)

更に、谷底からは壺を初めとして多くの日常雑器が出土した。それらは弥生時代中期から古墳時代初めにまで及ぶが、これらの土器は長期的な堆積のなかのものであり、セット的にもやや不確実なものがある。しかしながら、これらは不連続ながらも中期中葉から後葉のものが主体的であり、南方に位置する宝台遺跡で編年された宝台Ⅰ式・宝台Ⅱ式の範疇に納まるものである。ここでは編年としては不十分であるが、宝台編年を傍証として土器群の形態的変遷を捉え、長尾遺跡の時間的な位置づけの一考としたが諸事により詳細は後日改めて検討したい。

- A 3 頭部の内側に凹面側をもって静止。頭部は常に頭部の上に届かない。

A 4 内側が小耳羽裂したままになり難い頭部をもつ。頭部と咽頭の上部に取り付く。頭部に「三角形」のあるものとあるものがある。

1a 頭部が丸いのである。

1b 頭部は丸くして立ち上がり、横断面は腰やかで外観する。

2a 頭部は丸くして立ち上がり、横断面は腰やかで外観する。

2b 頭部は丸くして立ち上がり、横断面は腰やかで外観する。

2c 頭部は丸くして立ち上がり、横断面は腰やかで外観する。

3c 頭部は丸くして立ち上がり、横断面は腰やかで外観する。

4c 頭部は丸くして立ち上がり、横断面は腰やかで外観する。

A 5 頭部は頭部に内折し、頭後矢の横断面は腰やかで外観する。頭部と咽頭に凸部がつく。咽頭は球形をなす。

1a 頭部は丸くして立ち上がり、横断面は腰やかで外観する。

1b 頭部は丸くして立ち上がり、横断面は腰やかで外観する。

1c 頭部は丸くして立ち上がり、横断面は腰やかで外観する。

2a 頭部は丸くして立ち上がり、横断面は腰やかで外観する。

2b 頭部は丸くして立ち上がり、横断面は腰やかで外観する。

2c 頭部は丸くして立ち上がり、横断面は腰やかで外観する。

A 4 外部する先端部を頭部をもつ。

4a 横断面は頭部が広く外折する。

4b 横断面は頭部が広く外折する。頭部が腰やかである。

4c 横断面は頭部が広く外折する。頭部が腰やかである。頭部が腰やかである。

5a 横断面は頭部が広く外折する。頭部が腰やかである。頭部が腰やかである。

5b 横断面は頭部が広く外折する。頭部が腰やかである。頭部が腰やかである。

5c 横断面は頭部が広く外折する。頭部が腰やかである。頭部が腰やかである。

頭部は頭部の外側に凹面側をもつ。頭部は常に頭部の上に届かない。

B 1 頭部は丸くして、横断面は外反して下向す頭部。

B 2 頭部は丸くして、横断面は外反して下向す頭部がつく。

2a 頭部が丸くして下向す。

2b 頭部が丸くして下向す。

2c 頭部が丸くして下向す。

B 3 頭部は丸くして、横断面は下向す頭部をもつ。頭部は常に頭部の上に届かない。

3a 頭部は丸くして、横断面は下向す頭部をもつ。頭部は常に頭部の上に届かない。

3b 頭部は丸くして、横断面は下向す頭部をもつ。頭部は常に頭部の上に届かない。

3c 頭部は丸くして、横断面は下向す頭部をもつ。頭部は常に頭部の上に届かない。

B 4 頭部は丸くして、横断面は下向す頭部をもつ。

D 1 頭部は頭部もしくは、前頭をもつ。

1a 頭部が丸くして、横断面は下向す頭部のもの。

1b 頭部は丸くして、横断面は下向す頭部のものには内凹がつく。

1c 頭部の形状は頭部に内凹して、内凹部をもたない。

1d 頭部は丸くして、横断面は下向す頭部のもの。

E 1 頭部は丸くして、横断面は下向す頭部をもつ。頭部は丸くして、横断面は下向す頭部のもの。

E 2 頭部は丸くして、横断面は下向す頭部をもつ。頭部は丸くして、横断面は下向す頭部のもの。

E 3 頭部は丸くして、横断面は下向す頭部をもつ。頭部は丸くして、横断面は下向す頭部のもの。

E 4 頭部は丸くして、横断面は下向す頭部をもつ。頭部は丸くして、横断面は下向す頭部のもの。

E 5 頭部は丸くして、横断面は下向す頭部をもつ。頭部は丸くして、横断面は下向す頭部のもの。

E 6 頭部は丸くして、横断面は下向す頭部をもつ。頭部は丸くして、横断面は下向す頭部のもの。

E 7 頭部は丸くして、横断面は下向す頭部をもつ。頭部は丸くして、横断面は下向す頭部のもの。

E 8 頭部は丸くして、横断面は下向す頭部をもつ。頭部は丸くして、横断面は下向す頭部のもの。

E 9 頭部は丸くして、横断面は下向す頭部をもつ。頭部は丸くして、横断面は下向す頭部のもの。

E 10 頭部は丸くして、横断面は下向す頭部をもつ。頭部は丸くして、横断面は下向す頭部のもの。

E 11 頭部は丸くして、横断面は下向す頭部をもつ。頭部は丸くして、横断面は下向す頭部のもの。

E 12 頭部は丸くして、横断面は下向す頭部をもつ。頭部は丸くして、横断面は下向す頭部のもの。

E 13 頭部は丸くして、横断面は下向す頭部をもつ。頭部は丸くして、横断面は下向す頭部のもの。

E 14 頭部は丸くして、横断面は下向す頭部をもつ。頭部は丸くして、横断面は下向す頭部のもの。

E 15 頭部は丸くして、横断面は下向す頭部をもつ。頭部は丸くして、横断面は下向す頭部のもの。

E 16 頭部は丸くして、横断面は下向す頭部をもつ。頭部は丸くして、横断面は下向す頭部のもの。

E 17 頭部は丸くして、横断面は下向す頭部をもつ。頭部は丸くして、横断面は下向す頭部のもの。

E 18 頭部は丸くして、横断面は下向す頭部をもつ。頭部は丸くして、横断面は下向す頭部のもの。

E 19 頭部は丸くして、横断面は下向す頭部をもつ。頭部は丸くして、横断面は下向す頭部のもの。

E 20 頭部は丸くして、横断面は下向す頭部をもつ。頭部は丸くして、横断面は下向す頭部のもの。

B 1 頭部は丸くして、横断面は下向す頭部をもつ。

B 2 頭部は丸くして、横断面は下向す頭部をもつ。

B 3 頭部は丸くして、横断面は下向す頭部をもつ。

C 1 頭部は丸くして、横断面は下向す頭部をもつ。

C 2 頭部は丸くして、横断面は下向す頭部をもつ。

C 3 頭部は丸くして、横断面は下向す頭部をもつ。

C 4 頭部は丸くして、横断面は下向す頭部をもつ。

C 5 頭部は丸くして、横断面は下向す頭部をもつ。

C 6 頭部は丸くして、横断面は下向す頭部をもつ。

C 7 頭部は丸くして、横断面は下向す頭部をもつ。

C 8 頭部は丸くして、横断面は下向す頭部をもつ。

C 9 頭部は丸くして、横断面は下向す頭部をもつ。

C 10 頭部は丸くして、横断面は下向す頭部をもつ。

C 11 頭部は丸くして、横断面は下向す頭部をもつ。

C 12 頭部は丸くして、横断面は下向す頭部をもつ。

C 13 頭部は丸くして、横断面は下向す頭部をもつ。

C 14 頭部は丸くして、横断面は下向す頭部をもつ。

C 15 頭部は丸くして、横断面は下向す頭部をもつ。

C 16 頭部は丸くして、横断面は下向す頭部をもつ。

C 17 頭部は丸くして、横断面は下向す頭部をもつ。

C 18 頭部は丸くして、横断面は下向す頭部をもつ。

C 19 頭部は丸くして、横断面は下向す頭部をもつ。

C 20 頭部は丸くして、横断面は下向す頭部をもつ。

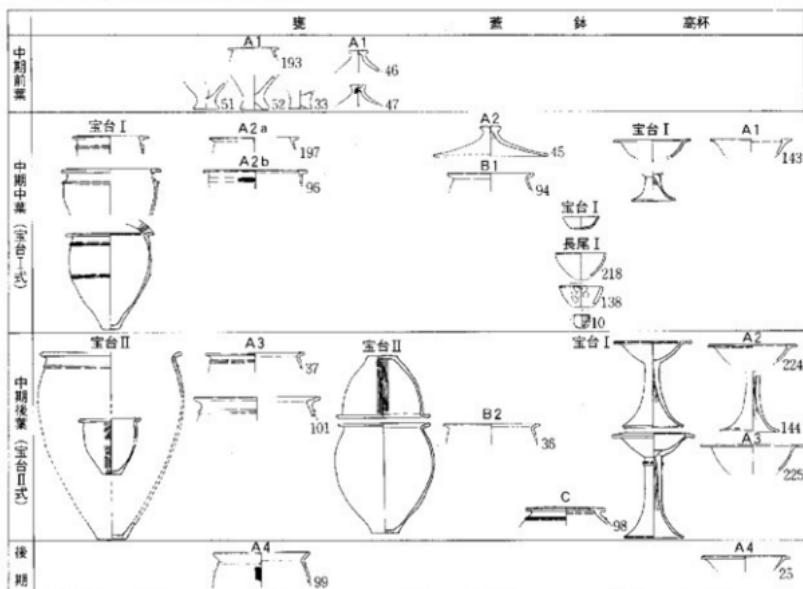
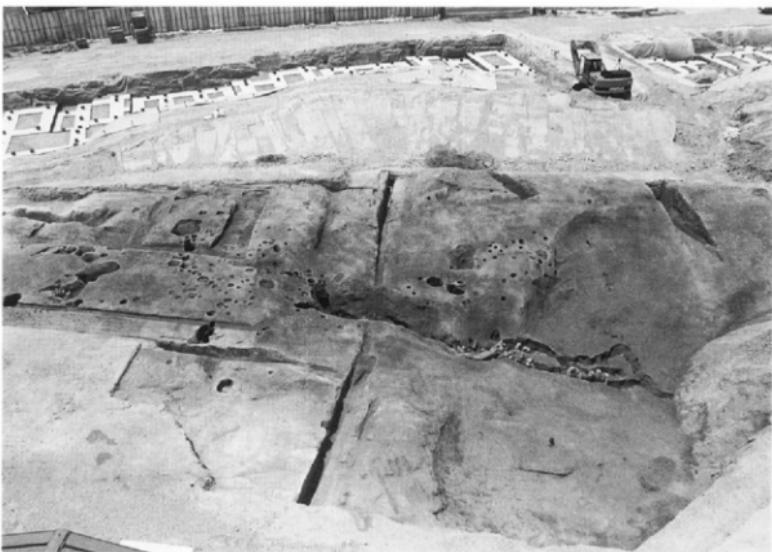
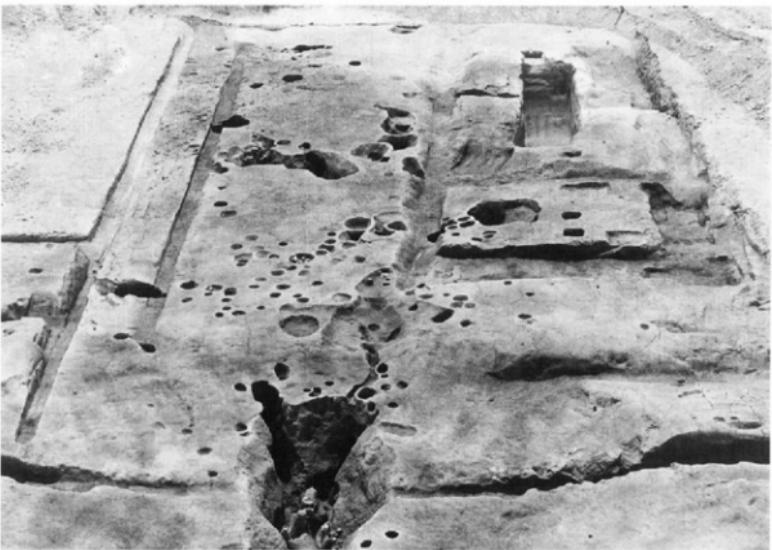


Fig.37. 長尾遺跡弥生土器編年私案図2 (1/16)

P L A T E S



(1) 調査区全景（南より）



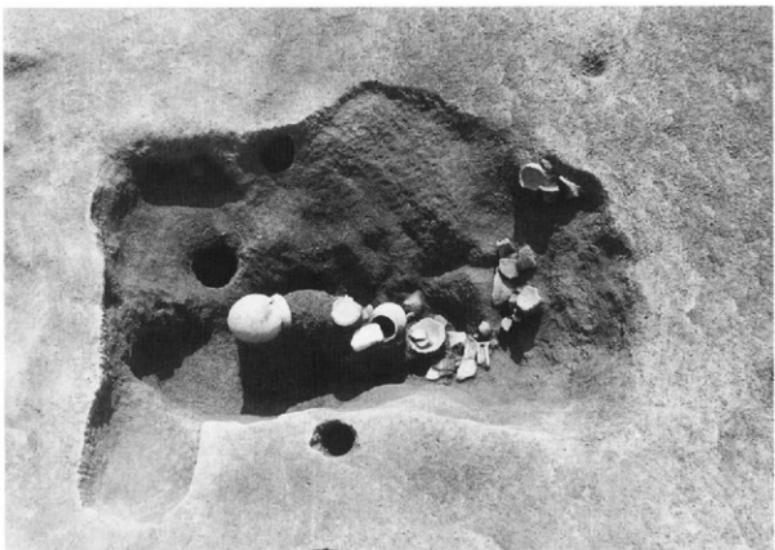
(2) 台地上遺構群（東より）



(1) 調査区全景（南より）



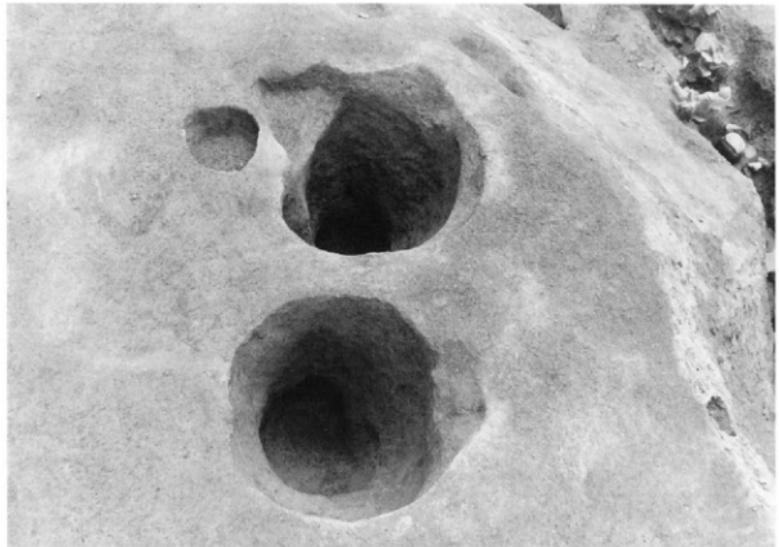
(2) 調査区全景（東より）



(1) 1号土壤 (東より)



(2) 1号土壤 (東より)



(1) 2・3号土壤(西より)



(2) 4号土壤(東より)



(1) 5号土壤 (南より)



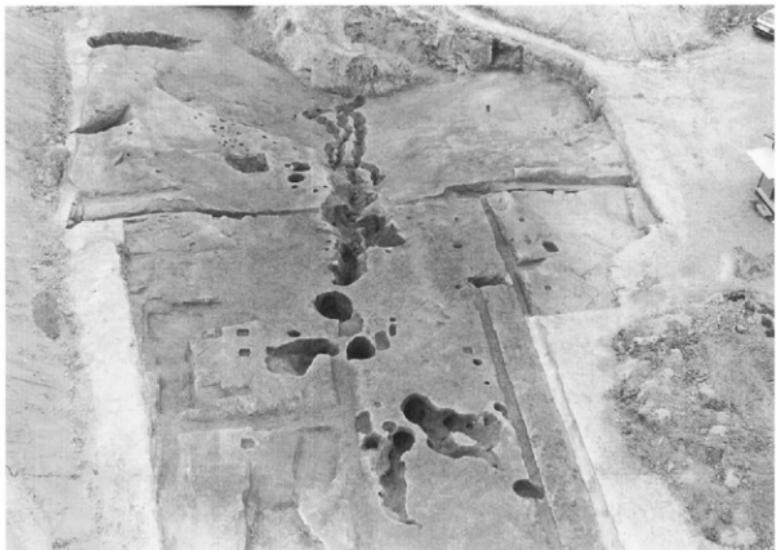
(2) 6号土壤 (南より)



(1) 7号土壙 (南より)



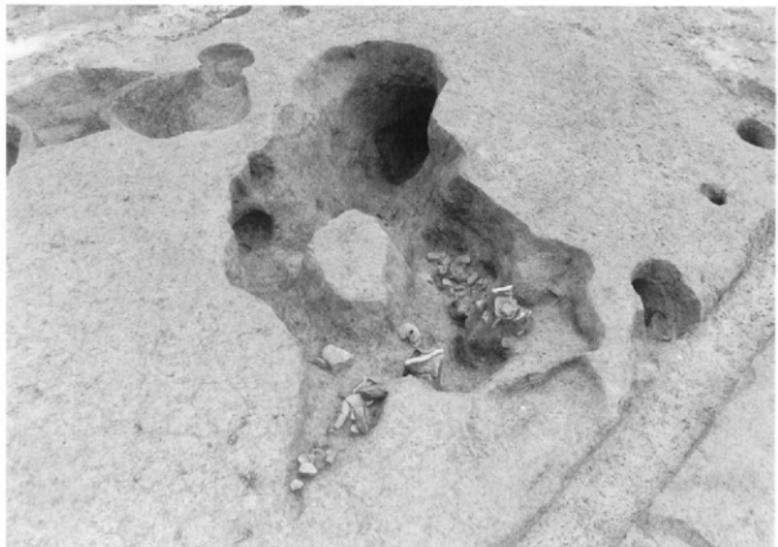
(2) 17号ピット (南より)



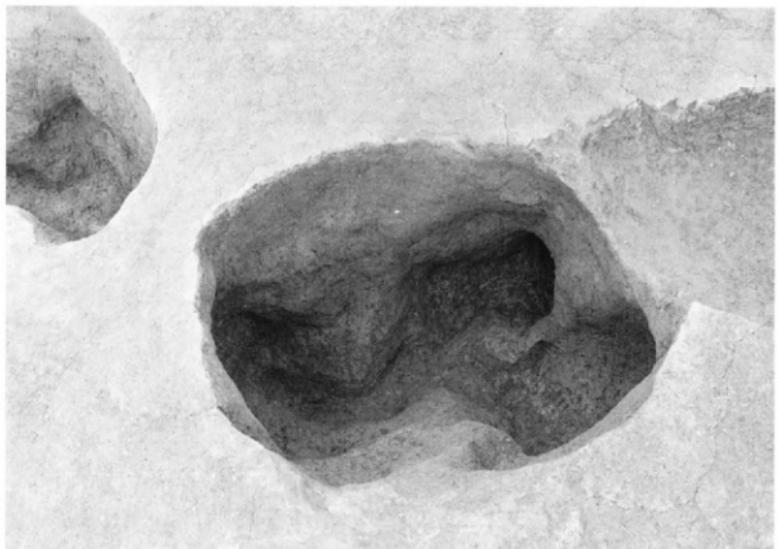
(1) 谷流水路全景 (西より)



(2) 谷流水路 (東より)



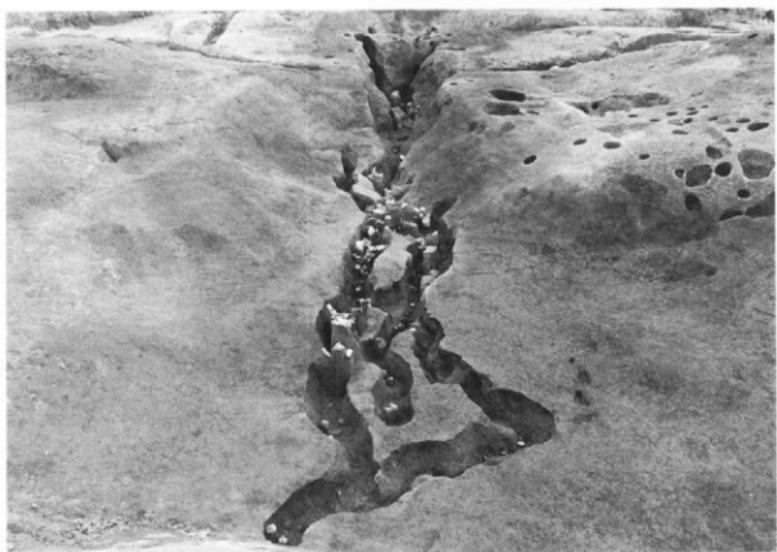
(1) 1号流水路 (南より)



(2) 9号流水路 (北より)



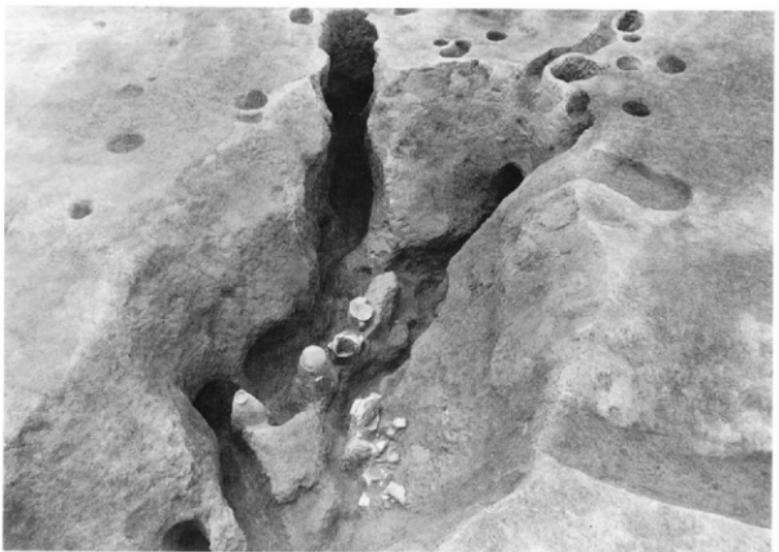
(1) 谷最下層遺物出土状況（南より）



(2) 谷最下層遺物出土状況（東より）



(1) 谷頭土層断面図（東より）



(2) 谷頭下層遺物出土状況（東より）



(1) 谷最下層遺物出土状況（東より）



(2) 谷最下層遺物出土状況（北より）



(1) 谷最下層遺物出土状況（東より）



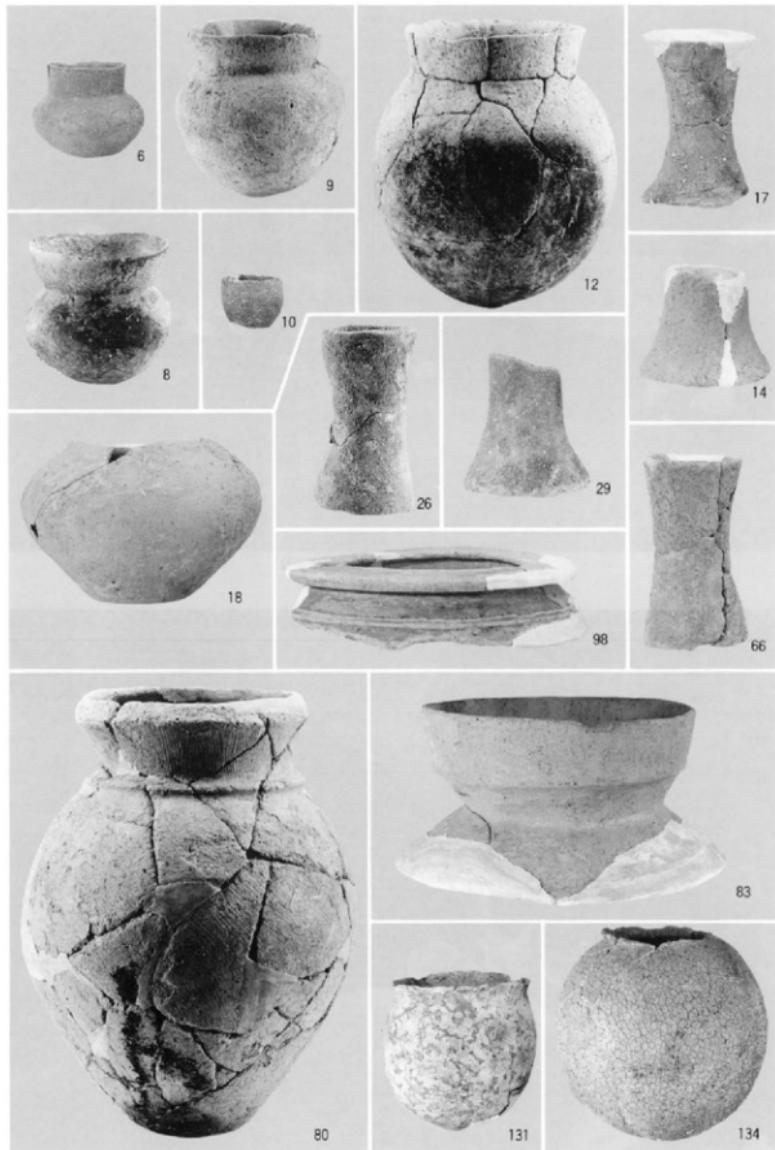
(2) 谷最下層遺物出土状況（東より）



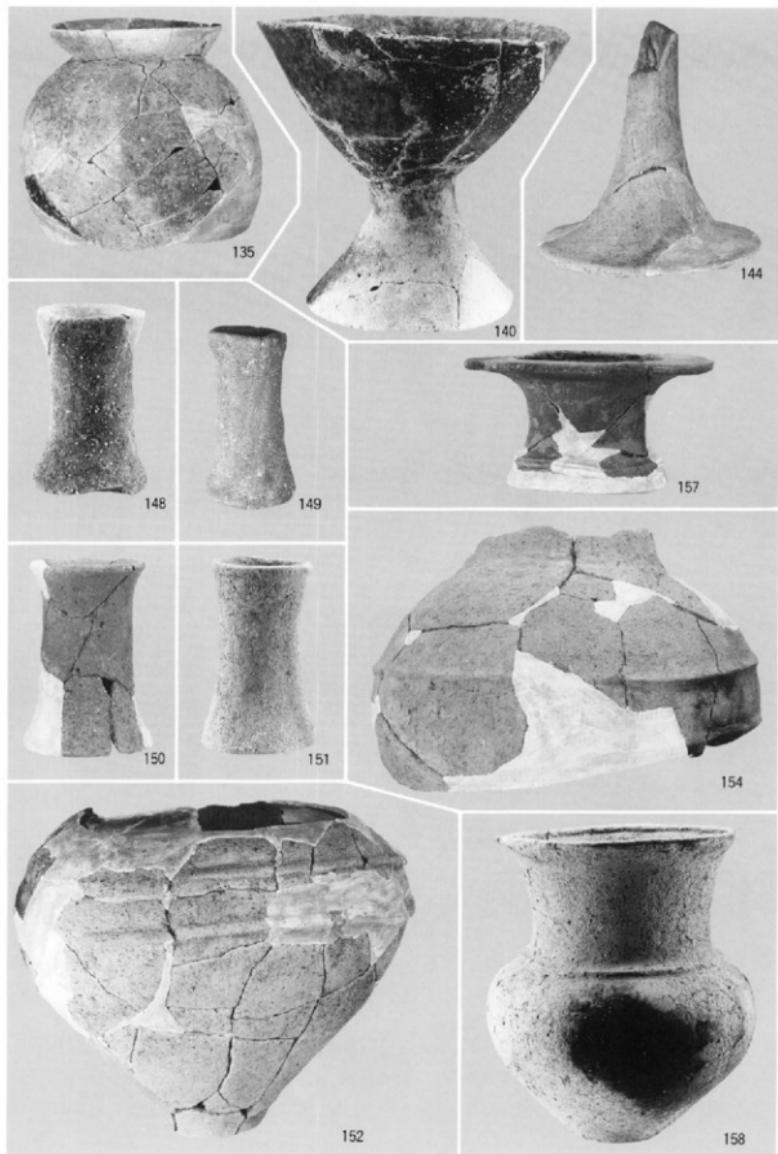
(1) 谷最下層遺物出土状況（東より）



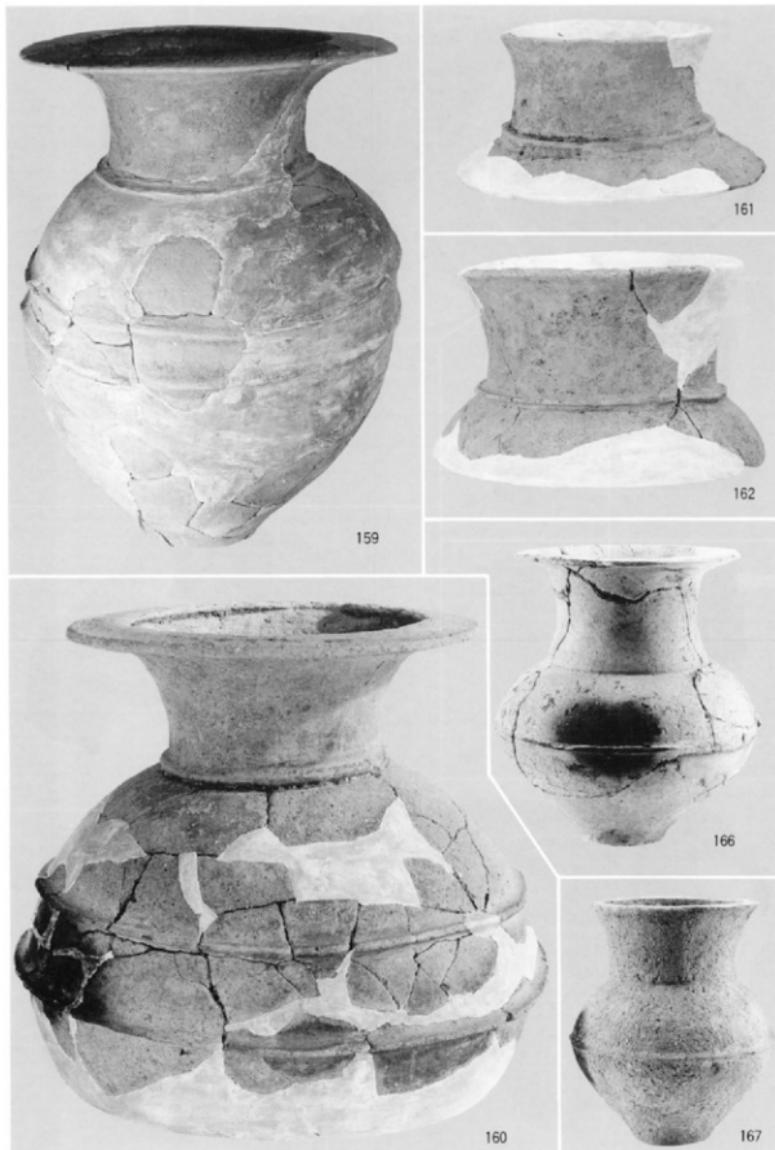
(2) 谷最下層遺物出土状況（東より）



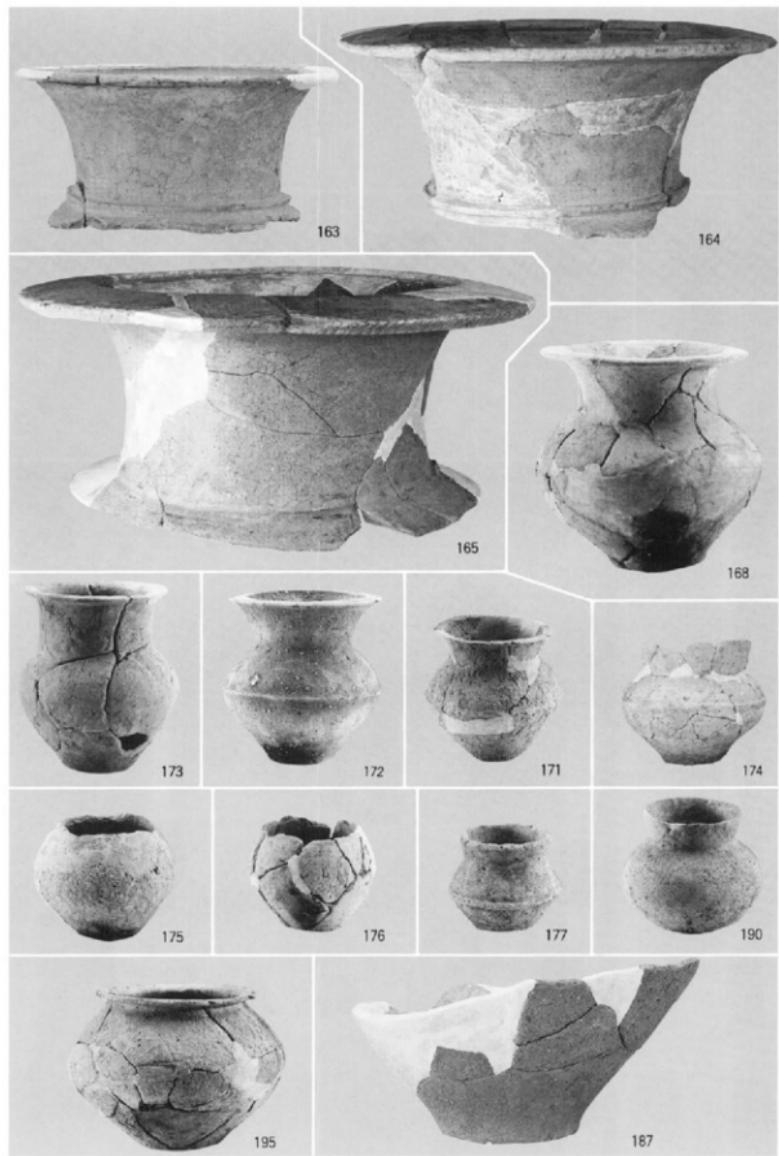
出土土器 1 (1/4)



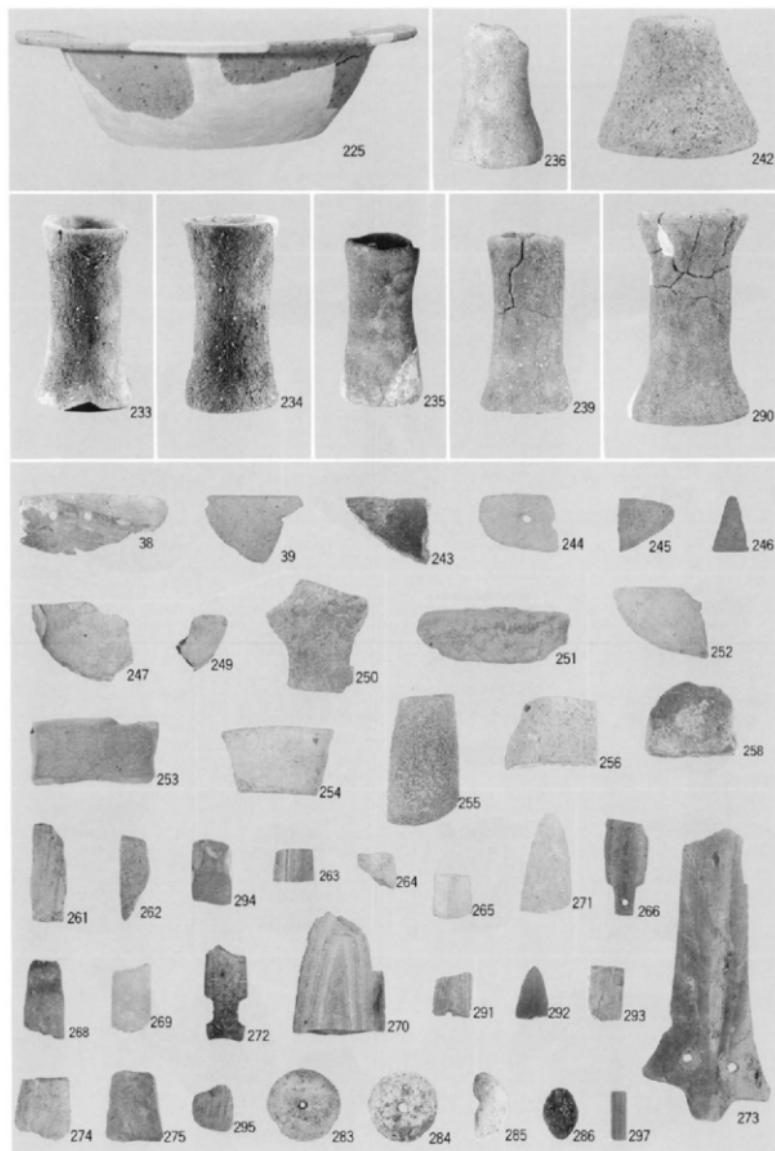
出土土器 2 (1/4)



出土土器 3 (1/4)



出土土器 4 (1/4)



出土土器 5 (1/4) · 石器 (1/3) · 土製品 (1/3) · 玉管 (1/1)

福岡市埋蔵文化調査報告書第417集

長尾遺跡

一長尾市営住宅建替に伴う発掘調査報告書

1995年3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1-8-1

印刷 福博総合印刷株式会社